

古典学の現在 I

平成12年3月

古典の伝承 - 死海写本と旧約研究 - 守屋彰夫

ヨーロッパにおける古典の伝承 西村賀子

インド暦プログラムPANCANGAについて 矢野道雄

古典和歌における表現分析の新手法 南里一郎 ほか

【調整班研究会発表要旨】

日本古典文学本文データベース（実験版）の試験公開 安永尚志

朱熹テキストの解説より 木下鉄矢

西洋古典の伝承史における予型論的視点の影響について

- 『牧歌』IVと『オデュッセイア』を中心に - 秋山 学

日本現存朝鮮古書のデータベース化について 藤本幸夫

1998 - 2002



古典学の再構築

叢書「古典学の現在」の刊行について

平成 10 年度から 5 年計画で発足した文部省科学研究費補助金特定領域研究「古典学の再構築」は、平成 11 年度から公募研究も加わり、計画研究と合わせ 75 件の研究が共同研究を実施している。

ここに編集したのは、本年度の研究成果の一部である。この特定領域研究の目的の一つは、諸分野の古典学の連携研究にある。まずは他分野の研究の現況を知ることが必要であろう。

このような考えにより、他分野の研究者が理解できるような形で提出いただいた研究成果を、叢書「古典学の現在」として刊行することになった。

特定領域研究が立ち上がってまもないため、実際に連携研究から生まれた成果は未だ僅かである。今後そのような成果も陸續と現れることが期待される。

この叢書は、速やかな公開を期するため、成果が提出されしだい随時刊行することになっている。多くの成果をお寄せ下さるよう、心からお願い申し上げます。

平成 12 年 3 月

領域代表 中谷英明

目次 古典学の現在 I

平成 12 年 3 月

古典の伝承 - 死海写本と旧約研究 - 守屋彰夫	1
ヨーロッパにおける古典の伝承 西村賀子	15
インド暦プログラム PANCANGA について 矢野道雄	35
古典和歌における表現分析の新手法 南里一郎ほか	53

[調整班研究会発表要旨]

日本古典文学本文データベース（実験版）の試験公開 安永尚志	82
朱熹テキストの解読より 木下鉄矢	88
西洋古典の伝承史における予型論的視点の影響について - 『牧歌』IVと『オデュッセイア』を中心に - 秋山学	99
日本現存朝鮮古書のデータベース化について 藤本幸夫	103

古典の伝承…死海写本と旧約研究…^{注1}

守屋彰夫

(A02「本文批評と解釈」班・東京女子大学)

第二次世界大戦の戦火が止んで間もなくの1947年から1956年にかけて、死海西岸から西へ2キロメートル弱の、エルサレムからは東へ20キロメートル強のクムラン地域 (Khirbet Qumran) にある11の洞窟から、土器などを含む様々な生活用品と共に、大量のヘブライ語文書、それよりは少ないが相当な量のアラム語文書、それに分量は僅かだがギリシア語で書かれた文書が発見された。また上記のクムランの11の洞窟の外に、死海周辺のワディ・ムラバアト (Wadi Murabba'at、調査は1951～1952年)、ナハル・ヘベル (Naḥal Hevel、調査は1951～52年と1960～61年)、マサダ (Masada、調査は1963～65年) などでも文書が発見されている。後者をも含めてこれらの文書を「死海写本」と総称している。

これらの文書は便宜的に、聖書写本に直接関わる文書と、聖書との直接的関わりがない文書との二つの範疇に分けることが出来る。前者には旧約聖書のイザヤ書の完全な巻物 (1QIsa^a) や大詩編巻物 (11QP^s^a) を始め、エステル記を除く全ての旧約聖書正典文書や外典を含む大量の写本断片が含まれている。^{注2} 後者の聖書との直接的関わりがない文書には、『共同体の規則』(1QS)、『感謝の詩編』(1QH^a)、『戦いの書』(1QM) などが含まれている。勿論これらの文書には聖書からの引用もあり、又、『ハバクク書註解』(1QpHab)、『創世記外典』(1QapGen) や『ヨブ記のタルグム』(11QtgJob) などを見ると、当時のユダヤ教で聖書がどのように解釈され、読まれていたかを示してくれる本文伝承に關す

る大変貴重な歴史資料である。

ところで、旧約聖書全体を含む最古の写本は1008/9年に筆写された「レニングラード写本」Codex Leningradensis (1008/9)であり、現代の旧約聖書の翻訳は大抵はこれを原典としている。これは子音テキストに中世のマソラ学者が発音記号とアクセント記号などを加え、欄外にマソラ学者の註が付いたものです。この「レニングラード写本」より権威があり、正確で優れていると言われている「アレppo写本」Aleppensis (925)の刊行が現在進行中であるが、残念ながらこの写本は1947年の動乱の最中に元来の487葉の内295葉（全体の6割）を残して紛失してしまった。紛失した部分が発見される可能性がない訳ではないだろうが、多くの学者は絶望視している。何れにしろ1947年以降の死海周辺での聖書写本の発見は、断片的な中世の写本を除けば1000年以上古い聖書本文の存在を明らかにしたことになる。旧約聖書がいつ頃成立したかは難しい問題だが、死海写本は少なくとも紀元前後にわれわれが旧約聖書に数え上げている個々の文書がどのような状態にあったのか、それらが紀元後の1000年間にどの程度正しく伝達されてきたのかどうかという問題を解く鍵を提供することになる。又、紀元前後に既に「正典」となった書物が存在したのか、「正典化」の過程が進行しつつあったのか、あるいは未だそのような概念はなく、複数の系統の写本が特別な権威を付与されることなく単に並存していただけなのかという問題への解答も死海写本の研究は与えてくれるであろう。¹³あるいは、紀元前3～1世紀にギリシア語に翻訳された七十人訳聖書（4世紀のCodex Vaticanusが残存）や、サマリア五書と呼ばれるサマリア教徒（ユダヤ教のグループ）が伝えているモーセ五書（創世記～申命記）¹⁴とマソラテキストとの相違が存在するが、死海写本の聖書はどちらを支持するだろうか、あるいはそれらとも異なる読みを示すだろうか。このような聖書本文研究に関する興味深い問題に対して死海写本の聖書は、様々な角度からそれらへの解答の手がかりを提供している。

半世紀以上前に発見が始まった死海写本は、これまで一部の学者が独占的に研究を進めてから、テキストを刊行するという手順を踏んだために学問的手続きとしての不公平さが指摘されて多くの研究者の不満を買ってきたが、イスラエルのヘブライ大学の Emanuel Tov が責任者となって、期限を限った刊行計画の全体像が示され、現在進行中である。従って現在はある意味で死海写本研究の集大成の時代を迎えていると言えよう。死海写本に関する出版も世界の学界で相次いでいる。²⁸⁵

このように死海写本は聖書正典化の過程に関しては紀元前後にどのような段階にあったかを示す第一級の歴史資料である。死海写本発見以前の通説に拠れば、紀元前445年にバビロニアからやって来た祭司エズラがモーセ律法の原形をエルサレムに齎した（エズ7章、ネヘ8章参照）後、紀元前400年頃までに五書の正典化が行われ、やがて紀元前200年頃までに預言書の正典化も完了した。そして最終的には紀元後90年頃 ヤブネ／ヤムニアで諸書の範囲が定められ、ヘブライ語聖書は完成したと考えられていた。ところが死海写本の発見によって明らかになった事実は、未だ正典化されない段階の実に多種多様な聖書写本の存在であった。いくつかの例を挙げる。マソラの読みに近いものとしては1QIsa^bを指摘できよう。完全な形で発見された1QIsa^aも正書法の問題を除けば基本的にはこれと同じである。すなわち、紀元前の時代からレニングラード写本の時代まで1000年以上に亘って、テキストが如何に正確に伝承されたことを証示するケースである。これに対し、先に触れた【ハバクク書註解】(1QpHab)には3章がない。この場合には註解者が前にしたテキストに元来3章がなかったのか、何らかの理由で解釈の対象にならなかったから3章がないのかということが推測される。前者の場合なら未だテキストが固定されておらず、流動的な状態にあったと考えられよう。第11洞窟で発見された詩編集成11QPs^aにはマソラにはない8篇の詩が含まれていて、マソラと順序も異なる。この場合には次のような推測が成り立つ。先ず正典化されたテキストの存在を

前提にすれば、この詩編集成は祭儀用に編集し直されたものとも考えられようし、或いは「異端」の人々による集成と想定することも可能であり、はたまたこの共同体の「図書館版」のような性格の文書とも想像できよう。それに対し、この時代は未だ正典化の過程にあると前提すれば、収録された詩の数が異なり、順序も異なってもよいことになる。各々のテキストの安定化が異なる段階にあったことも想定でき、一般的な結論は引き出せないが、多種多様な写本が存在という事実が様々な可能性を推測させることがわらう。

この死海写本の発見に基づいてこれまでに提案された旧約聖書の正典化に関する代表的な立場は次の三つに要約できよう。先ず最初の立場は W. F. Albright-F. M. Cross によるもので、多種多様なテキストは各々バビロニア、パテスチナ、エジプトに由来し、各々の地域的特徴に収斂させる考えである。二番目の立場は Shemaryahu Talmon が唱える立場で、特定の集団が特定のテキストを愛好した結果として多種多様なテキストが存在すると説明する。三番目の立場は Emanuel Tov によるもので、多種多様なテキストを前提しつつもそれらを原マソラ、原七十人訳、孰れにも属さないテキストの三つに区分しようとする考えである。われわれはどの立場を採用するか結論を急ぐべきではなく、これら三つの立場を当時のテキストの実態を発見する導きの糸として利用することが大切であろう。

死海写本が発見された周辺には紀元前二世紀頃からイエス時代を経て、第一次対ローマ反乱（紀元後 68 年）の期間にコミュニティーが存在したことが知られている。これはまさにキリスト教が成立する時期に重なっており、新約時代史への解明にも大きな寄与をなすことが期待されている。しかしここでは死海写本が旧約聖書の本文伝承にどのような光を投げかけたかを中心に考察を進める。以下ではいくつかの聖書写本に直接関わる文書テキストを取り上げて、死海写本が旧約聖書テキストの伝承研究に齎した実例を紹介する。

(1) 4Q1 Genesis-Exodus^a26

断片 1 は古来「アケーダー」(創 2 2 章 9 節に全聖書中 1 回だけ出てくる 'qd「縛る」という語根に由来)として古来親しまれてきた創 2 2 章の 1 節(1 4 節の一部)で、これをマソラ(子音のみ)と並記してみると次のようになる。

'll[h]ym yr'h 'sr y'[mr (断片 1)

yhwh yr'h 'sr y'mr (マソラ)

両者は冒頭の語だけが異なり、その他は一致していることが判ろう。断片 1 の冒頭は 'lhyim 「エロヒーム」と読み、「神 [々]」を意味する普通名詞である。これに対しマソラは yhwh と書かれており、これはイスラエルの神の固有名詞である。伝統的にこの神名 yhwh を発音することは避けられ、「主」に当たる言葉や単に「名前」と読み替えられてきた。²⁷ところで、1 4 節の神の固有名詞 yhwh が元来のものなのか、それともここには 8 節と同じように普通名詞 'lhyim があったのかについては長い論争の歴史がある。この小さな断片が普通名詞の存在を従来主張してきた立場にも一つの有力な根拠を与えることになった。もっとも七十人訳はヘブライ語の神に関する普通名詞と固有名詞を各々 θεός と κύριος とで訳し分けており、われわれの当該の語句に関する限りでは、七十人訳はマソラと完全に一致している。たった一語の相違だが、創世記 2 2 章の資料問題を考える上で、神名 yhwh が元来のものなのか、それとも二次的なものなのかという極めて繊細な問題にこの断片は一つの資料的根拠を提供することとなったと言えよう。

(2) 4Q58 4QIsaiah^d28

断片番号 1 1 ii の中のイザヤ書 5 3 章 1 1 節前半途中までの部分に該当する箇所には、1QIsaiah^a、1QIsaiah^b、七十人訳と並行する興味深い読みが見られる。

m'ml npšw yr'h 'w[r]wšb' bd'tw (断片 1 1 ii)

m' ml npšw yr'h yšb' bd'tw (マソラ)

ἀπὸ τοῦ πόνου τῆς ψυχῆς αὐτοῦ δεῖξαι αὐτῷ φτῶς καὶ πλάσαι
τῇ συνέσει (七十人訳)

このイザヤ書 5 章 1 節 1 節の始めの部分のマソラには yr'h 「彼は見るであろう」の目的語がないが、七十人訳には動詞の目的語として「光を」φωςがある。このような事実を前にして従来は、マソラの伝承過程で目的語が何らかの理由で脱落してしまったと考え、七十人訳に倣って「光を」を補充するか（口語訳、NRSV）、「彼は見るであろう」の目的語を 1 節冒頭の前置詞句に求める解決法（KJV）が採られてきた。これに対してわれわれの断片には yr'h 「彼は見るであろう」の目的語として「光を」に相当する 'wr が部分的に読み取れる。すなわち、七十人訳の読みと一致することが判明した。註がないのでどちらを採用したかは断定はできないが、七十人訳ないし 4QIsaiah^d を生かした訳が関根正雄訳^{註9}に見られる（「その生命の苦しみ故に彼は光を見て満ちたりる」）。新共同訳は「彼は自らの苦しみの実りを見」と訳す。これは推測するに、節冒頭の前置詞句を部分詞として、その句全体を動詞「見る」の目的語と理解したものであろう。従って新共同訳に従って忠実に訳すなら本来は「彼は自らの苦しみの実り [の一部] を見」となろう。これはマソラの忠実な訳と言えよう。関根清三訳^{註10}は「その生命の艱難辛苦の後、彼は見るだろう。」となっていて「見る」という動詞の目的語を落としている。冒頭の前置詞を「の後」と時間的な意味に訳すことの正否はともかく、これもマソラの子音テキストのみならず母音符合を含めた読み方に従う限りではマソラに忠実な訳と言えよう。ここを目的語が欠けているのではなく、「彼は見るであろう」と理解した動詞 yr'h の終りの h をマソラの母音符合だけ変更して三人称、女性、単数の人称接尾辞と取れば（訳としては「彼はそれを見るであろう」となろう。創 3 8 章 1 5 節参照）、これより前に三人称女性単数の名詞を探せばよいことになる。すると 1 0 節に新共同訳で「子孫」と訳されている語は男性名詞だが、

同じ綴りで母音符合を変えれば「腕」を意味する女性名詞となる。即ち、「彼はその〔神の〕腕を見るであろう」という訳が10節で可能であり、文脈にもそれなりに合致する。このように、マソラそのままでは解釈が困難な場合、しかもマソラと七十人訳に相違がある場合、基本的には三つの選択肢が存在することが解ろう。一つは勇氣はいるが困難さをそのまま残してマソラを忠実に翻訳語に再現するというやり方であり、二つ目は七十人訳に依存して理解するやり方であり、三つ目はマソラの子音テキストは正しいことを前提に、母音符合を変更してテキスト内で合理的な解釈を求めるやり方である。今回のケースでは当該の死海写本の出現によって、七十人訳が動詞の目的語「光を」を勝手に挿入したのではなく、目的語が入っていたヘブライ語テキストが存在した可能性を証明したことになる。勿論だからと言って目的語「光を」がある方が本来の唯一のテキストだと直ちに断定できる訳ではない。しかしたった一語の存在が古代訳を含めて様々な本文伝承の存在を示唆し、解釈の可能性を広げることを証示することとなった。

(3) 4Q28 4QDeuteronomy^a 11

第四洞窟からは申命記の写本が21発見されている。われわれの断片が最も古く、申命記23章26節～24章8節までの部分が収められている。

この断片全体では綴りに関してはほとんどマソラとの相違がないが、一箇所だけマソラとの相違が顕著なのが断片3行目の半ばである。

w]šlhh mbytw whlkh whyth l'yš[(断片3行目)

w]šlhh mbytw wyš'h mbytw whlkh whyth l'yš 'hr (マソラ)

καὶ ἀπελοῦσα γένηται ἀνδρὶ ἑτέρῳ (七十人訳)

われわれの断片には神命記24章2節冒頭部分「そして彼女は彼の家から出て」の部分が欠落している。そして七十人訳もその影響下にあるヴルガタ訳もこの部分が無く、すぐ次の whlkh whyth l'yš 'hr 「そして彼女

は行って、そして他の人のものとなる」に対応する部分だけが翻訳されている。この断片が出現するまでは、七十人訳が不注意でこの部分を訳し忘れたのではないかとの疑義も生じたが、現在では七十人訳は元来 *wyš'h mbytw* が無いテキストに基づいて翻訳した可能性が推測できる。この欠落している文言がないと離婚された女性が再婚するまでどこにいたかが多少曖昧になる。離婚された女性が、実際に最初の夫の家から一度完全に出て行ったことを法文上明示しているマソラは、サマリヤ五書やタルグム、或いは同じ洞窟出土の写本 4QDeut^{k2} と一致している。この箇所に関しては二通りのテキスト伝承が存在したことが判明した。

(4) 11Q1 11QPaleoLev^{#12}

マソラとの相違はわずかだが、例えば断片 F の 3 行目(レビ 14 : 17)には次のような例も存在する。

'l twnk 'zn hmthr hymnyt (マソラ)

'l r'tn[]k 'zn hmth[(断片 F 3 行目)

マソラは「浄めの儀礼に与る者の右の耳たぶに」と書かれている。われわれの断片では二番目の語が *twnk* ではなく、*r'tn[]k* となっている。つまり、最初の二文字を除去して破損している箇所に *waw* を補うとマソラと一致するが、実際には何の訂正の痕も見えない。だからわれわれの書記は *r'tn* (「皮膚病 [の一種]」) と書こうとしたと推測される。この語は聖書では使用されていないが、少し後代の *Genesis Rabbah* (400 年頃)、*Tosefta* (300 年頃) や *Yerushalmi* (400 年頃) に現われる。*r'tn* (「皮膚病 [の一種]」) でもレビ記のこの文脈に合致する。但し、この節の七十人訳がマソラを忠実に翻訳していることからすると、われわれの断片は訂正されるべき箇所がそのまま残ってしまった可能性もあると言えよう。

次に同じ断片のすぐ上の行(レビ記 14 章 16 節後半の始めの部分に相当)をマソラなどと比較する。

]whzh mn hšmn šb' p[(断片 F 2 行目)

whzh mn hšmn b'šb'w šb' p'mym (マソラ)

καὶ ῥανεὶ ἐπτὰκις τῷ δακτύλῳ (七十人訳)

マソラは 16 節後半全体は「そして [彼は] オリーブ油の一部を彼の指で七回振り撒く。」と書かれている。われわれの断片には b'šb'w 「彼の指で」が欠落しているが、実はサマリヤ五書にも欠けている。七十人訳は「彼の指で」に相当する語 τῷ δακτύλῳ はあるが、「オリーブ油の一部を」に相当する語が欠けている。これは 16 節前半に既に言及されているので、省略された可能性もある。七十人訳の一つの写本 LXXFklmr καὶ ῥανεὶ ἐπτὰκις ἀπὸ τοῦ ἐλαίου がわれわれの断片と一致する。七十人訳のいくつかの写本を比べてみると「彼の指で」と「オリーブ油の一部を」という要素を採用したりしなかったりとなりに自由に取り扱っていると見えよう。それは遡ればヘブライ語写本の段階で種々様々なテキストが存在したことにもなる。

(5) 4Q84 4QPsalms^b注13

この断片群全体は詩編の 91 篇 5 節後半から 118 篇まで及んでいるが、ここで扱う断片は詩編 102 篇 2 節以下を含む部分である。詩編 102 篇に関係するのは、第 20 欄の詩 102 篇 10～17 節、第 21 欄の詩編 102 篇 18～25 節、第 22 欄の詩編 102 篇 26 節～103 篇 3 節である。

以下では、この断片とマソラとの間にどのような相違があるかをいくつか見てみよう。

yyr'w gwym 't šm yhwh wkl mlky h'rš 't kbwdw (第 20 欄 13 行目)

wyyr'w gwym 't šm yhwh wkl mlky h'rš 't kbwdk (マソラ)

「[そして] 諸国の民はヤハヴェの御名を、[そして] 地の全ての王はあなたの栄光を畏れる。」

第 20 欄 13 行目 (詩編 102 篇 16 節) でマソラ冒頭は wyyr'w (「そ

して彼らは恐れるだろう』)となっていて接続詞 *waw* で始まっているが、この断片では *waw* が欠落している。またマソラで *kbwdk* (「あなたの栄光」) となっている箇所の人称接尾辞がこの断片 14 行目では「彼の [ヤハヴェの] 栄光」となっている。七十人訳は以上の二点に関してはマソラと合致している。マソラはすぐ次の 17 節の終りで *bkbwdw* (「彼の栄光の内に」) となっているので、この断片はマソラにあるような二人称、男性、単数から三人称、男性、単数への人称接尾辞の交替を避けて、人稱接尾辞を三人称で統一させたのかも知れない (イザ 59 章 19 節参照)。但し、この断片 16 行目は *bkbwd* (17 節末尾の語) の直後で破損してその後ろにどの人稱接尾辞が続いているかは不明のままとなっている。この断片では「地」を意味する *'rṣ* の定冠詞 *hē* が一段上に書かれていて、後からの訂正付加であることが見て取れる。

第 21 欄の 5～6 行目と詩 102 篇 20 節とを比べてみよう。

ky ḥšqyp mm'wn [qd]šw yhwh mm'wn l'rṣ (第 21 欄 5～6 行目)
「まことに、ヤハヴェはその聖なる住まいから見下ろし、その
住まいから地へ […]」

ky ḥšqyp mmrwm qdšw yhwh mšmym 'l'rṣ hbyṭ (マソラ)
「まことに、ヤハヴェはその聖なる高みから見下ろし、[彼は]
天から地へ目を注がれる」(私訳)

となっていて、われわれの断片には二度も *mm'wn* (「住まいから」) が現われる。これは明らかに申命記 26 章 15 節の始めの部分「あなたの聖なる住まいから、天から見下ろして下さい」を想起させる。但し詩 102 篇 20 節の「その聖なる高みから」はすぐ後の「天から」と並行句を構成しており、申命記とは微妙なずれがある独自の表現であることが判る。聖書では「聖なる住まい」という表現の方がこの詩編に一回だけ現われる「聖なる高み」より数多く用いられている (ゼカ 2 章 17 節、エレ 25 章 30 節、詩 68 篇 6 節、代下 30 章 27 節)。ここでも七十人訳はマソラに忠実な訳となっている。

膨大な量の死海写本のうちから、標本抽出のような形でわずかな実例を取り上げたが、紀元前3世紀以降に本文伝承と解釈が不即不離の関係の中で、旧約聖書が生成していく過程が多少なりとも提示出来ていたら本稿の目的は達せられたことになろう。最後にここで取り上げた死海写本の断片が、本年11月2日（木）から19日（日）に有楽町そごうで開催される「東京大聖書展」に展示される。是非現物をご覧になって、旧約聖書という書物が生成していく過程への興味と関心を深められるようお願いして本稿を閉じさせて戴く。

^{#1} 本稿は2000年2月19日（土）1～5時に本郷学士会館分館にて行われた「本文批評と解釈」の第三回調整班会議・研究会（A02）で口頭発表した内容の中心部分をニューズレター用に書き改めたものである。当日の出席者はインド学の研究者が大半であり、前半の専門的な研究発表「古典インドにおける天啓聖典と個人の間」（吉水清孝氏）と活発な議論の後、インドにおける古典テキストの伝承と古代イスラエルにおける古典テキストの伝承との対話を試みようとしたものである。個々の専門的な問題は別にして、異なる研究分野の研究者との間で古典のテキスト伝承や聖典化の問題に関して相互理解が図られるよい機会となった。専門外の人間の質問にも懇切丁寧にお答え下さったご出席者に心よりの感謝を申し上げます。

^{#2} 現在の区分ではネヘミヤ記も欠けているが、エズラ記断片は存在し、当時は恐らくエズラ-ネヘミヤ記が一つの書物であった可能性があり、敢えて入れないことにしてある。立場によってはネヘミヤ記をも入れることも可能である。

^{#3} 紀元後1～2世紀に書かれた新約聖書には、旧約聖書の引用があり、

その中で旧約聖書の構成への言及箇所がある。それらの表現法からは既に正典化された旧約聖書が存在したという確証は得られないが、ある程度の集成を伺わせる。例えば「律法や預言者」(マタ 5 : 17、7 : 12、11 : 13 [「預言者と律法」]、22 : 40 ; ルカ 16 : 16 ; 使 13 : 15、24 : 14) や「モーセの律法と預言者」(使 28 : 23。ヨハ 1 : 45 参照) という表現は、字義通りにはモーセ五書と預言書の集成を指すだろうし、「モーセの律法と預言者 [の書] と詩編」(ルカ 24 : 44) や「モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり」(ルカ 24 : 27) という表現は現行のヘブライ語聖書の3部構成を想起させる。その他に、「聖書」[書かれたもの]という言い方が50回ほど使われている。

^{註4} サマリヤ五書はその起源についての詳細は不明だが、ヨーロッパの世界には1616年にその存在が知られることとなり、1632年に印刷に付された。サマリヤ五書の外には、ヘブライ語聖書、ヘブライ語聖書のギリシア文字音写、ギリシア語のアクィラ訳聖書、シンマコス訳聖書、七十人訳聖書、テオドチオン訳聖書の6欄並記で構成されている『オリゲネス・ヘクサプラ』(3世紀前半に完成)がある。更に、5~6世紀の写本が残存しているシリア語訳ベシッタ、旧約聖書のラビ文献での引用などがある。

^{註5} ごく最近に限っただけでも、P. W. Flint and J. C. VanderKam (eds.), *The Dead Sea Scrolls after Fifty Years*, 2 vols, Brill, 1998-99; F. G. Martínez and E. J. C. Tigchelaar (eds.), *The Dead Sea Scrolls: Study Edition*, 2 vols, Brill, 1997-98; R. A. Kugler and E. M. Schuller (eds.), *The Dead Sea Scrolls at Fifty*, Scholars Press, 1999; L. Schiffman and J. C. VanderKam (eds.), *The Encyclopedia of the Dead Sea Scrolls*, 2 vols, Oxford, 2000; M. Abegg, Jr., P. Flint, and E. Ulrich (translated and with commentary), *The Dead Sea Scrolls*

Bible, HarperCollins, 1999 と出版が目白押しである。又、これまで出版された聖書以外のテキストを集めた電子ブック版もある (E. Tov, ed., *The Dead Sea Scrolls: Electronic Reference Library*, 2, Brill, 1999)。

註⁶ Eugene Ulrich, et al., *Discoveries in the Judaean Desert*, vol. 12. Oxford Univ. Press, 1994. Pp. 7-18, Pls. I. 最古の創世記写本で、書写材料は皮革。ハスモニア朝時代の標準、準標準書体で書かれており、紀元前125 - 100年頃のものと考えられている。

註⁷ 口語訳は二番目の単語をも含めて「アドナイ・エレ」と訳しているが、この「アドナイ」が「[私の] 主」に当たる。新共同訳はこの最初の二語を「ヤーウェ・イルエ (主は備えてくださる)」と神名 yhwh を音訳した後にその意味を補充している。両方ともマソラテキストに忠実な訳を与えようとしていることが判る。

註⁸ Eugene Ulrich, et al., *Discoveries in the Judaean Desert*, vol. 15. Oxford Univ. Press, 1997. Pp. 82-88, Pls. XIV-XV. 書写材料は皮革。後期ヘロデ時代の標準書体で書かれており、紀元後1世紀半ばのものと考えられている。正書法に関しては、1QIsaiah^a、1QIsaiah^b、マソラと比べると短綴法の傾向が顕著である。

註⁹ 関根正雄訳『旧約聖書』(教文館、1997年、889頁)

註¹⁰ 関根清三『イザヤ書』(岩波書店、1997年、249頁)

註¹¹ Eugene Ulrich, et al., *Discoveries in the Judaean Desert*, vol. 14. Oxford: Clarendon Press, 1995: pp. 7-8, Pls. I. 最大の所で各々高さ10 cm、幅13.9 cm。皮革。古様式からハスモニア朝への移行期の公式書体で、

F. M. クロスの判断では紀元前175～150年頃と推定されている。

注¹² D. N. Freedman, K. A. Mathews, *The Paleo-Hebrew Leviticus Scroll (11QpaleoLev)*. Winona Lake, IN, 1985. 書写材料は皮革。第11洞窟は1956年に発見された。レビ記の最古の写本の一つで、ヘブライ語古書体 (Paleo-Hebrew) で書かれている。紀元前2世紀終り頃から紀元前1世紀始めにかけてのもので、五書のヘブライ語本文が正典として確定していく前段階の写本なので、本文伝承上、極めて重要な地位を占める。F. M. Cross の本文類型区分に拠れば、マソラはバビロニア系、サマリヤ五書がパレスチナ系、七十人訳がエジプト系と地理区分される。この観点からは、われわれのレビ記の写本は基本的にパレスチナ系に属すると考えられるが、詳細に検討する余地も残されている。

注¹³ P. W. Skehan, "A Psalm Manuscript from Qumran (4QPs^b)", *CBQ* 26 (1964): 313-322. E. Ulrich, P. Flint, *Discoveries in the Judaean Desert*, vol. 16 (in press).

ヨーロッパにおける古典の伝承

西村賀子

(B01「伝承と受容(世界)」班・市頓学園短期大学)

(1) はじめに

今日幸いにもわれわれは、かなりの量の西洋古典の文献を読むことができる。もちろんかつて生産された著作の膨大な量に比べれば、われわれが手にしている文献はごくわずかでしかない。とはいえ、この間に横たわる年月の長さや世界史の有為変転を考えれば、西洋古典文献の保存の確率はかなり高いほうだと言わざるをえない。

ヨーロッパの古典は、ギリシアの場合には紀元前8世紀ころのホメロスに始まり、ラテンの場合でもおよそ前3世紀から始まっている。したがってヨーロッパの古典の文献は2800年もの歳月を生き延びてきたことになる。この長い年月の間には略奪や戦争、火災による焼失などのさまざまな危機があった。古代の文化や文献に対してまったく敬意が払われなかった時代もあれば、古典教育や古典研究が完全にすたれていた時代もあった。

それにもかかわらず今日われわれがはるか昔のギリシア・ローマの知的遺産を手にすることができるようになったのは、いったいどのような理由によるのであろうか。また、どのような過程を経てきたのであろうか。そしてまた、西洋の古典文献が生き延びてきた歴史を振り返ることによって、われわれは何を学ぶことができるのであろうか。

古典が後世まで生き残れるかどうかという問題に関しては、仔細に見れば個々の作品ごとに事情が異なっている。だが西洋古典の伝承一般について、文献が残存した要因はおおむね三つに分類できる。すなわち、

(1) 物理的要因、(2) 社会的要因、(3) 宗教的要因である。

拙論では、ギリシア・ラテンの文献の伝承がこれら三つの要因によってどのように左右されたかをきわめて簡略した形で素描する。ただし、「古典を訪ねて3000年」という長いはるかな旅を手短にすませるのは無理な話であるから、今回はさしあたりルネサンスまでの時代について述べる。

なぜルネサンスで区切るのか。それは、ルネサンス後期に発見されていた文献の総量は現代のそれとだいたい同じくらいであったと推定されるからである。むろんパリンプセスト（再利用写本）やパピルスはルネサンス人の知るところではなく、彼らの知見はもっぱら中世写本によって得られたものであった。したがってルネサンス時代に知られていた文献は現代人の知見よりもいくぶん少なかったことは確かである。だがわれわれの知識の構成要素の総体はルネサンス後期のそれと、基本的にはあまり変わらないのである。

言うまでもなく、写本の本格的な学問的研究の開始は17世紀を待たなければならなかったし、古文書学や文献学の登場はさらにそれよりも後のことである。文献に対する主要な関心が真正のテキストの探究やよりよい精緻な読みの追求へと向かい、文献研究の質がいちじるしく向上するのはルネサンスよりも後の時代である。とはいえ、近代的な学術研究の基礎となる文献そのものは、ルネサンスによって準備されていたのである。ルネサンスはテキストの存亡そのものにかかわる危機に終止符を打った時代であり、西洋古典文献の伝承史にとって一つの大きな区切りの時代であったのである。

(2) 物理的要因

知は観念的で抽象性を帯びている。だが知の源泉は、書物というきわ

めて具体的かつ物理的な要素による制限を受けている。本の素材や形態、あるいは表記方法や字体の変遷などといった実的な要素は、古典の文献の存亡を思いのほか大きく支配していた。

ギリシアでもラテンでも、最も初期のテキストはナイル川の三角州に自生するパピルスに記され、巻物という形でスタートした。一般にパピルスの耐久性は300年前後であった。2世紀ころに書かれたパピルスが20世紀のエジプトで発見されたが、これは保存条件が例外的によく整っていた幸運なケースである。また卷子本という形態は書物の耐用年数を促進するどころか、逆に本の命を縮めるものであった。パピルス本は1巻あたりおよそ10メートル前後、なかには45メートルにも及ぶものもあった。読了後は巻き戻す必要があったために本がいたみやすかった。また片面すなわち巻きの内側にしか文字が書けなかった上、次に述べるように、使用された文字はより多くのスペースを必要とする大文字体だったので、1巻に収まるテキストの量は限られていた。中世写本にある欄外の注がパピルスの卷子本になく、注釈が別の本に記されたのも、巻物という形態に起因すると考えられる。というのは、一説によると古代の人々は本を読むとき、すでに読んだ部分とまだ読んでいない部分をそれぞれ片方ずつの手に持ち、立って音読したという。両手がふさがっているので、読みながら書物のなかに書き込みをすることができなかったのである。

書体についてはギリシア・ローマともに、もっとも初期には大文字体しかなかった。現代では単語と単語の間には当然のこととしてスペースがもうけられている。句読点の存在もあたりまえのものになっている。だが古代の書物にはword divisionもピリオドもカンマもコロンのまったくなかった。改行もパラグラフも不在であった。このため古代の書物は非常に理解しにくいものであった。

パピルスは書物の素材として西暦2-4世紀まで用いられたが、やがて羊皮紙に席を譲ることになる。安価なパピルスの入手が困難になった

ためである。羊皮紙の使用は3世紀ころから始まったが、それよりもずっと前の時期に羊皮紙の開発が試みられたことがあった。それはヘレニズム時代のことで、パピルス生産地のエジプトが輸出を禁止し、パピルスの代替品として羊皮紙の初歩的な開発が試みられた。しかし輸出はやがて解禁されたため、本格的な開発には至らなかった。

素材の変化は同時に書物形態の変化をもたらした。文字を書く素材がパピルスから羊皮紙に変わったとき、本という言葉で今日われわれがすぐに思い浮かべる形、すなわち冊子本が登場した。冊子本という形態の発展には書き板の影響があったと考えられる。書き板はローマ世界で日常生活で非公式に用いられており、板に蠟を上塗りしたり、カバやハンノキなどの樹皮を薄く削いだものを利用した書記材料であった。ちなみにラテン語の *liber* は「本」と「樹皮」を意味する。書き板では、何枚かを重ねて片方の端を皮紐や留め金で綴じる工夫がなされていた。書物の素材がパピルスから羊皮紙に変わったとき、すでに書き板でなされていた「綴じる」という方法が新しい書記材料に応用され、羊皮紙冊子本が誕生した。

羊皮紙冊子本は早くも1世紀後半には出現していた。キリスト教関係の文書では2世紀にその使用が開始されていたが、羊皮紙冊子本が古典のテキストで一般化するのには、キリスト教文書の場合よりも後のことであった。

羊皮紙冊子本は書物の耐久性をいちじるしく向上させた。のみならず、取り扱いやすく、1ページ当たりの情報量も多く、参照も簡便であるなど多くの利点があった。しかし皮肉なことに、このような利点が古典テキストの命運を分ける第一歩となった。なぜなら、パピルス卷子本のテキストを羊皮紙冊子本に手で書き写す作業は決して容易なことではないからである。ましてやテキストが採用している書記形態は、先程触れたように、非常に判読しにくいものであったから、筆写も困難であった。テキストを書き写す作業は、非常に長い時間と集中力と忍耐力を要求し

た。ちなみに中世の修道院の写本室で一冊分の本を書き写すのに3~4ヶ月要したと言われている。それゆえ、どのテキストを転写するか、どのテキストを転写しないかという大きな取捨選択が、パピルス卷子本から羊皮紙冊子本への移行に伴って必然的に起こったのである。この時点で転写されなかったテキストは、パピルスの寿命とともに早晩朽ち果てるしかなかったのである。便利で耐久性のある羊皮紙冊子本の登場という一見喜ばしいことが、文献にとっては最初の運命の分かれ道になったのである。

テキストの命運を分かť分水嶺は、書物の素材や外観の変化だけではなかった。書体の変化もまた、テキストが生き残りを決定する重要なファクターであった。時代が下るにつれて古い字体を判読できる人がいなくなる。それゆえ、古い字体の写本が顧みられなくなるのは、時の流れに伴う自然の成り行きである。だがそれだけではなく、きわめて人為的な過程によっても、古い字体で記された写本は姿を消したのである。すなわち転写が終ってしまうと元の写本は処分され、永遠に消滅するという憂き目にあったのである。

字体の変遷やそれに伴う写本の喪失については、ギリシア語の場合とラテン語の場合とで、事情がやや異なっている。

まずギリシア語文献の場合には、大文字体の使用の時期が非常に長く続いた。とくに4世紀に発達したアンシャル体もしくは聖書大文字体と呼ばれる大文字体がおよそ600年ほど使用された。4世紀という時期は、パピルスに代わって羊皮紙冊子本が一般的になった時期であるから、初期の羊皮紙冊子本に書かれたテキストは大文字体で記されていたことになる。

やがて大文字のアンシャル体は小文字体にとって代わられることになる。小文字体の発達の起源は、公文書、書簡、報告書などに官吏が用いていた字体で、ビザンティウムのストゥディオス修道院がその発祥の地であると言われている。そして9世紀中葉には、非常に発達した形の小

文字体がビザンティウムで使用されるようになっていた。その代表的かつ最も初期の例は、助祭用の福音集のウスペンスキー本(835年)である。

9世紀にはアンシャル体で書かれたテキストを小文字体に転換する作業が精力的に行なわれた。現在あるギリシア語テキストの起源をたどると、そのほとんどの原型は9世紀あたりに作成された小文字体の写本である。しかも、原型写本がわずか1冊しかないことが多いのである。この事実は何を物語っているのであろうか。それは、アンシャル体から小文字体へという9世紀に起こったこの大転換に組み込まれなかったテキストには、それが後世まで伝承される可能性がほとんどなかったということの意味しているのである。

それにしても、なぜ小文字体の写本しか残っていないのであろうか。羊皮紙の耐久性から考えれば、小文字体の写本を作るときに手本になった大文字体の親写本が残っていてもよさそうなものである。実は、親写本となったアンシャル体の写本は写し終えられた後はもはやお払い箱となり、人為的に破棄されてしまったのである。このようにしてギリシア語テキストの場合、大文字体から小文字体への転写がバピルス卷子本から羊皮紙冊子本への変化につぐ第二の運命の岐路となったのである。

一方、ラテン語テキストにおける書体の変遷はもう少し複雑である。ラテン語の字体は何種類かあるが、記念碑に用いられていた刻文用の書体を応用した方形大文字体の例は少ない。書物用の標準的な字体はルスティカ体で、前1世紀後半から6世紀までかなり長期にわたって標準的に使用された。この字体は素朴大文字体とも標準書体とも古典大文字体とも呼ばれる。やがてこのルスティカ体から、あるいはローマ世界で日常的に用いられていた草書体から発達するのがアンシャル体で、アンシャル体はギリシア語の場合と同じように、4世紀から9世紀まで使用された。以上はいずれも大文字体である。したがってギリシアでもラテンでも9世紀くらいまで大文字体の使用が続いたことになる。

ラテンの最初の小文字体は、草書体から発展した半アンシャルと呼ば

れる字体である。ラテン語小文字体の発展は地域や時代によって多種多様であった。煩雑を避けるためにここではその詳述を割愛する。ただ一つ言えることは、ギリシア語文献の場合とは異なって、大文字体から小文字体への転換はラテン語テキストの存亡を決定する致命的な要因となったわけではなかったということである。

ラテン語テキストの緩慢な消滅は、書体の度重なる変化の時代ではなく、ルネサンス時代に訪れる。ルネサンスは古典テキストにとってきわめて幸運な時代であったと一般に考えられている。その時代に、数多くの写本の発見・収集・筆写が人文主義者たちによってなされた。今日われわれが古典に接することができるのは、まぎれもなく、ルネサンスで古典が再評価されたからである。

しかし逆に、あまり知られていないことだが、それゆえにこそ不運な末路をたどった写本もあった。というのは、ルネサンスの人々はいったんテキストの筆写を完了すると、親写本にもはや一瞥もくれず、無造作にそれを打ち捨てたり、紛失してしまったりしたからである。だからルネサンスまではなんとか生き延びてきたテキストでも、この時代以降、永久に消滅してしまっただけではない。

同じような不幸は、やはりルネサンス時代に普及し始めた印刷本の場合にも起こった。

まず印刷術と古典の関係について簡単に述べる。よく知られているように、15世紀半ばにマインツでグーテンベルクによって印刷術が発明された。このおかげで、手で書き写すという面倒な作業は終りを告げた。ラテン語古典の多くは1465年から1475年ころにかけて印刷され、1570年代には大量のラテン語テキストの校訂版が刊行された。しかしギリシア語の場合には、文字のほかにアクセント記号と氣息記号があるため、テキストの活字化は容易に進まなかった。印刷技術上の困難以上に、読者層の薄さがギリシア語の場合には大きな障害になった。出版しても経済的に採算が取れないことは、出版業者にとって致命的であった。プラ

トンですらギリシア語の印刷校訂版がはじめて刊行されたのは、ラテン語の翻訳の印刷本（1484年）よりもおよそ30年ほど遅れた1513年のことであった。ついでながら、ラテン語圏でギリシア世界との交流やギリシア語の翻訳・言語学習・テキストの筆写などが始まるのは14世紀あたりからである。それが本格化するのには、東ローマ帝国の滅亡（1453年）によって多くの亡命ビザンツ人がイタリアに流入するようになったためである。

古典と印刷術について述べるときに忘れてはならないのは、アルドゥス・マヌティウスの重要性である。ギリシアの主要作家のテキストの最初の刊行本が出されたのはおもに1494年から1515年にかけてのことで、当時印刷業の中心地となっていたヴェネツィアで活躍したアルドゥス・マヌティウスとそのサークルによるものであった。アリストテレス、テオクリトス、ソポクレス、エウリピデス、ヘロドトス、トゥキュディデス、デモステネスをはじめとするおよそ28種類1000冊のギリシア語古典がアルドゥス・マヌティウスの印刷所から出版されたのであった。

印刷術の発明と普及は書籍の大量生産という点では画期的な喜ばしいものであったが、古典の文献にとっては取り返しのつかない事態を招くこともあった。校訂者は印刷本を作製するにあたってまず植字工に原稿を渡さなければならなかったが、その原稿の作成は非常に困難なものだった。本作りの基本的なコンセプトは、中世写本と同一の体裁を踏襲するというものであった。したがって、校訂者は写本を探し出し、他の写本と比較や照合をするだけではなく、欄外スコリアを元の写本と同じ位置にそのままの形で配置せねばならなかった。印刷職人に渡すべき原稿の作成そのものがたいへんな苦勞をともなったのである。そこで校訂者は、自ら校訂した新しいテキストや新たな注を記した原稿を苦心惨澹して作るよりも、もとの中世写本そのもののなかにテキストの訂正も注も印刷工への指示も書き込んだ。やがて印刷が完成すると、印刷工にわたった貴重な古い写本はたいていの場合、なくなってしまうのであった。

こうして、ルネサンスまでは足取りがつかめている写本でも、印刷完了後、行方不明になることがあったのである。

以上のような書物の変化の概観から、どのような結論が一般論として引き出せるだろうか。思うに、文明の進歩はつねに両義的であるということではないだろうか。つまり、書記材料や書物の形態、字体の変遷、印刷術の発明などの大きな変化によって、書籍の耐久性が増したり、効率がよくなったり、見た目が美しくなったり、便利になったりと、ある意味では利点のほうが多かった。しかしそれらは文明の光の部分であり、古典文献の保存という観点から見ると、文明の影の部分もなかったわけではないのである。

(3) 社会的要因

テキストの存亡を左右する条件は、上に述べた物理的要因だけではない。時代や地域の文化という社会的要素も無視できない要因として古典の伝承に作用した。文字を読める人々、とくにギリシア語やラテン語を読める人々がいなければ、あるいは書物を読もうという意欲のある人々や本を集めたいと思う人々がいなければ、写本の作製や書籍出版はとうていありえない。要するに、社会的需要の多寡の問題も古典学の運命を左右するのである。

さて、前の節で述べたように、ギリシア語の最も初期のテキストは非常に読みづらいものであった。パピルスの巻物にはコラムごとに、ただ大文字だけが一面にぎっしりと並んでいるばかりであった。アクセント記号もなければ、氣息記号もなかったし、単語の分ち書きも句読点も改行もなかった。散文だけではなく、詩でも劇でも同じような状態であった。つまり詩における改行あるいはスタンザごとのまとまり、劇における話者の交替を示す改行などは、今日のテキストなら当然あるべきもの

であるが、この当たり前のものすら古代のテキストには欠如していたのである。

判読の難しいテキストは、それを読む者にとってはもちろんのこと、テキストを写す人にとっても、予想をはるかに上回る困難がつきまとった。ここから、写されたテキストが元のテキストと違ってこわれてしまったり、原本とズレてしまうという深刻な問題が生じるのである。

テキストのこわれについて、古代の文献は非常に長い年月を経由してきたのだからテキストにこわれがあっても不思議はないと思っていないだろうか。テキストのこわれの原因をわれわれはなんとなく、写本がくぐってきた長い年月のせいにしがちである。しかし実際にはテキストの破損や欠陥は、古典が経過してきた歳月の長さに起因するのではない。それは予想以上に早い時期に始まっていた。早くも古代、それもムーセイオンにテキストが届く前、つまりヘレニズム時代になる前からテキストはすでにこわれ始めていたのである。

これほど早い時期から始まっていたテキストの欠陥を正そうという最初の試みをしたのが、アレクサンドリアのムーセイオンであった。ムーセイオンにおける学術研究がテキスト伝承に果たした役割は、ギリシア語の場合、決定的に重要なものであった。しかも、ここでの活動は間接的ながら、ラテン語テキストの保存にも影響を及ぼしている。その意味で、ムーセイオンが人類の知の歴史全体に対して果たした役割には、いくら高い評価を与えても高すぎることはない。

文化的な事象には突発的なものはあまりなく、たいていはその出現を準備する水脈がそれ以前から流れ始めているものである。ムーセイオンも例外ではない。このような学術研究機関が設立されるにいたった背後には、紀元前4世紀以来の書籍需要や書物取引の増加という現象があった。また、膨大な蔵書を所有していたプラトンのアカデメイアやアリストテレスのリュケイオンなどのモデルがなければ、万巻の書物を誇ったこの知の殿堂は生まれなかったかもしれない。ムーセイオンそのものの

重要性はいくら強調してもしすぎることはないが、そのあまり、その誕生を促した社会的な条件整備や文化の成熟を見逃してはならない。

さてムーセイオンの図書館は、その規模においても質においても、古代世界では空前絶後のものであった。蒐集された書物は当然パピルス卷子本で、そのジャンルは文学はもとより哲学、科学、弁論など多岐に渡った。その蔵書数は正確な数は不明ながらも、20万巻とも49万巻とも言われる。膨大な蔵書を整理しなければならなかったために学問研究が発達し、こわれの多い判読の困難なテキストを整理する必要に迫られた。さらにそこから、校訂記号やテキスト批判が発達し、読みやすさの工夫がなされ、標準的な公認テキストが確立された。これらの研究活動の中心になったのはゼノドトス、アリストパネス、アリストアルコスなどの学者であった。

ムーセイオンの活動は間接的ながら、ラテン語文献にも影響を与えた。アレクサンドリアの図書館やそこでの研究が刺激となって、前2世紀にはペルガモンにも同じような巨大な研究機関が作られた。ペルガモンで主にホメロスの研究をしていたクラテスがローマを訪れ、ムーセイオンの研究をラテン文学に応用する道を拓いた。またローマの偉大な文法学者スティロは前100年ころロドス島に向かい、アリストアルコスの直弟子ディオニシオス・トラクスから直接アレクサンドリアの学問を伝授されたと言われている。スティロと彼の弟子ウァロは、すでにこわれが生じていたラテン語テキストを救済したり、標準化したりした。後1世紀になってからでも、フラックスやヒュギヌスのようにアレクサンドリアの方法を手本にし、それを踏襲する文法学者が数多くいた。したがってムーセイオンにおける学問研究がなければ、ラテン文学ですら、後世まで残った文献の数は現存する文献よりもわずかしかなかったであろうし、その質の高さも保証されなかったはずである。その意味でも、人類の知の歴史上に果たしたムーセイオンの貢献は計り知れないのである。

ローマの研究者たちの活動を支えたのは、共和政後期にさかんになっ

た個人による図書収集や公共図書館建設、出版機関の発達などであった。アウグストゥスによってローマに図書館が2つ設立されたほか、2世紀にはエパソスやウルピアにも建造された。この傾向は帝政初期も続き、大規模な図書館が各地に建てられた。ラテン世界でもやはり図書館という書籍をめぐる社会条件の整備が古典研究を支える大きな要素であった。

書籍収集や図書館の整備と並んで重要な社会的制度は、学校教育であった。皇帝による学問の保護は、後の学校教育の基礎を築いた。ラテン語の古い作家のテキストが今も読めるのは、擬古主義の風潮が1世紀末に始まったことと、学校という制度が発達したおかげである。というのは、擬古主義によって古典作家の規範が確立され、ひいてはそういった作家のテキストが学校の教科書に採用されるようになったからである。学校の教科書というものにはいささか退屈な一面があるが、教科書に採択されたテキストは大量に書き写されるので、古典が後世まで生き延びるのに必要なだけの多数の写本が確保できるのである。教科書に載ることは古典文献の運命にとっては案外、重要な要素だったのである。

3世紀になるとローマ帝国は経済的衰退と政治的混乱に見舞われ、知的状況も衰微した。しかし興味深いことに、古典テキストの残存にとってこういった状況は必ずしもマイナスではなかった。というのは、注釈書や文法書が隆盛になり、特に歴史書では抜粋形式の概要が出現した。要するにこれは知識をお手軽に手に入れようという安直な方法の流行を意味するのだが、テキストそのものは、これらの本のなかでの引用その他によって不完全とはいえ一部だけでも保存されたのである。

ラテン文学における擬古主義に似た状況は、ギリシア語の場合にも見られた。東ローマ帝国でも2-3世紀の知的衰退はいちじるしかった。当時のギリシア語はすでに古典期のギリシア語とはいくぶん異なる言葉づかいになっていたので、人々は古典期アッティカの文体を模範にあおいだ。このような風潮はアッティシズムと呼ばれている。驚くべきことに、アッティシズムは帝政末期からビザンツ時代末期まで延々と千年以

上も続いた。アッティカの文体を範に仰いでそれを模倣しようとする傾向が強かったおかげで、アッティカ風文体のテキストが学校教育のなかで用いられた。そのおかげで、ギリシア語文献、とくに前5世紀のアッティカ方言の文献の残存が確実に約束されたのである。

学校教育とくに高等教育の充実は、明らかに古典テキストの保存に有利に作用した。4世紀のビザンツにおける高等教育の繁栄は古典詩と弁論の研究をうながした。そのみならず古典学にとってもっと重要なことは、今日テキストの読解や解釈にとってきわめて不可欠な「欄外スコリア」がこの時期のビザンツで生まれたことである。

6世紀後半から9世紀の間は古典にとってまさに冬の時代で、写本の筆写もほとんど行なわれなかった。だが9世紀中葉になって大学が復興されるやいなや純粋な学問研究も復活し、テキストの復元や普及もはかられた。古典の発展に功績のあった人物たちはほとんどが聖職者か教育関係者だった。古典への関心は9世紀からおよそ12世紀末までとぎれることなく継続した。ときに10世紀中葉に詩歌が詠まれていたことは確実で、『イリアス』のヴェネツィア本やアリストパネスのラヴェンナ本、アイスキュロスやソポクレスの劇を含むラウレンティアヌス本はこの時期に筆写された写本である。11世紀になると哲学、とくにプラトンが復活し、12世紀にはアリストテレスの主要な著作についての注釈書もほほそろった。

しかし13世紀初頭、1204年の第4字十字軍のコンスタンティノーブル占領と略奪は、非常に多くの古典テキストに致命傷を与えた。多数の図書館が打撃を受け、壊滅したテキストも数知れないほどであった。とはいえ東ローマ帝国の首都が一時的にニカエアに移転していた間も学問や教育は奨励され、そのおかげでイタリア南端部の修道院では写本製作や学校教育が継続された。

断続的であったとはいえ古典への関心は9世紀から続いた結果、13世紀後半から14世紀初頭にかけてビザンツ最高の研究成果が生み出され

た。ギリシア語テキストの研究や詩歌のアンソロジーの編纂、ラテン語のギリシア語への翻訳がマクシモス・プラヌデスによってなされた。また、現在われわれはアイスキュロスやソポクレスの悲劇をそれぞれ7編ずつしか持っていないのに対して、エウリピデスだけは19編も読むことができる。これは14世紀前半の人デメトリオス・トリクリニオスの発見に負うところが大きい。彼は現存写本の唯一の出所となっている9編のエウリピデス劇のテキストを発見したのである。

皇帝による学問の庇護や奨励が1世紀のローマで重要だったのと同じように、8世紀末から9世紀にかけてローマの遺産が復興するのに大きな力を発揮したのはやはり傑出した政治家であった。カール大帝の時代にはヨークからアルクインが招聘されて古典文化の種が播かれ、宮廷学校や修道院ないしは司教座聖堂附属学校が設立されて読み書き能力の向上が図られた。また宮廷はヨーロッパ全体の文化人の交流の場ともなった。この結果、本の需要が増加し、書籍製作の規模は空前の規模に達し、ラテン語文献の保存はいちじるしく前進した。またギリシア語文献への関心もこの時代に刺激された。

カール大帝の宮廷図書館は、古典のテキストの中心基地であった。古代写本から書き写された本がここに集められたばかりではなく、宮廷図書館の写字室でも質の高い写本が作製された。さらにこの宮廷図書館の書籍が親写本となって修道院の蔵書が作られた。カール大帝の死後、宮廷図書館にあった本の多くはやはり修道院に流れ込んでいった。

古典の復興は12世紀にもふたたび起こった。いわゆる12世紀ルネサンスである。この復興を支えたのは、識字率の向上と世俗の学校であった。かつて貴族と聖職者の占有物であった読み書き能力はこの時代には他の階級にも広く一般に普及した。そして写本筆写や教育の担い手の地位が中世の修道院から司教座聖堂附属学校や都市の学校にとってかわられたことから、テキスト伝承の幅も広がり、量的にも飛躍的に増大した。

以上の社会的要因の概観から、古典の継承や発展にとって重要なもの

として図書館と教育制度があげられる。

(4) 宗教的要因

宗教的な要因とくにキリスト教は、ヨーロッパにおける古典の伝承に決定的に重要な役割を果たした。古典の多神教世界と一神教のキリスト教とはある意味では、相容れないものであった。しかしそれにもかかわらず、古典が残存できたのはキリスト教のおかげだと言っても過言ではない。

異教とキリスト教の対立は、キリスト教が勢力を持ち始めたころからずっと続いていた。衝突の頂点は4世紀に見られ、宗教的に最終的な勝利をおさめたのはキリスト教であった。しかし学問や教育の領域では、新興の宗教は長い伝統を持つ古典を打ち負かすことはできなかった。キリスト教が理論武装するための武器は古典テキスト、とくにプラトンやストア派に求められたし、官吏や教養階級を育成するための教材もまた古典を用いるしかなかった。

それだけであれば、宗教的敗北にもかかわらず古典が精神世界で本質的な勝利をおさめたのは古典そのものの内在的価値によるということになる。だがこの勝利は古典の内在的価値によるものであったことはまぎれもない事実であるが、それだけではなく、4世紀の教父たちが古典に対して非常に寛大であったことを忘れてはならない。キリスト教の指導者たちは決して古典の文献や異教徒を迫害したりはしなかった。たとえばキリスト教の聖職者が古典のテキストを焚書したという事実は確認できない。聖バシレイオスやナジアンズスの聖グレゴリウスなどは古典テキストに大いに敬意を払っていたし、教育においても宗教的な主張の相違を越えた共通のカリキュラムが採用されていた。

ただし教父の寛大さにも限界があった。古典の主要テキストは重視さ

れたが、キリスト教にとって危険なテキストは無視されたのである。その結果、反キリスト教的なテキストは残存できなかった。

キリスト教が古典に対して与えた影響は、総じて決してマイナスとは言えない面が多い。だがとくにギリシア語テキストに関しては、宗教論争が古典教育や研究を妨げたことを特記しておかなければならない。ビザンツ世界では6世紀後半からおよそ300年にわたって偶像破壊論争が続いた。このため学問と文化は衰退し、この時期に写本が写されることはほとんどなかった。とはいえ、このころはすでに朽ちやすいパピルス本ではなく、永続性の高い羊皮紙本を使用していたから、テキストが一向に顧みられないからといって、そのためにテキスト本体が失われたわけではない。その意味で偶像破壊論争の時代は古典文献に積極的なダメージをもたらしたわけではなかった。

ビザンツ世界が偶像破壊論争に明け暮れていた6世紀後半からの時代は、ギリシア学にとっては衰退の時代であったが、西欧のラテン語文献にとっては必ずしも衰退の時代ではなかった。

西ヨーロッパでは宗教的要因と社会的要因がからみあう形で古典が保護されていった。すなわち教育や書籍の管理が教会の手に移ったのである。修道院が写本の保存に、ひいては古典学の発展に大きな役割を果たしたことはよく知られている。ゲルマン民族の侵入や戦争などによる難を逃れるために書籍は修道院に集積された。そして写字室を備えた修道院の模範は、ローマの貴族出身の百科学者カッシオドルスが6世紀半ばにイタリア南端に設立したヴィヴァリウムの修道院である。カッシオドルス以来、古代の奴隷たちがせっせと書き写していた現場である写本工房は、中世になると修道院の写本室に取って代わられることになるのである。

修道院というキリスト教的な制度そのものは起源的には古典とは無関係であった。だが結果的には古典が保護されてきた大きな要因はこの制度によってであった。このパラドクシカルな関係は、モンテ・カッシノ

修道院の場合に端的に見られる。モンテ・カッシノ修道院は480年生まれのパネディクトによって設立された。パネディクトは官吏になるためにローマで修辭学や文学を学んだ。この当時、修辭学は世俗的・政治的権力や名誉への最短距離を約束するものだったからである。しかしパネディクトは無秩序と流血に満ちたローマに失望し、文学と学問への嫌悪をつのらせて決別した。彼は隠遁生活に入ったのち、やがて修道院を設立したのである。つまりモンテ・カッシノ修道院の起源は創始者の古典文学への嫌悪と異教の否定から始まったのである。それにもかかわらず結果的には、とくに11世紀に入ると、この修道院が古典テキストの保存の砦となったのである。

修道院とそこでの写本作製作業は、大陸では6世紀後半からおよそ200年にわたって停滞する。だが幸いにもアイルランドやスコットランドでコロンバヌスなどが修道院を設立し、そこで学問と教育が継続し発展した。

キリスト教が古典テキストに及ぼした負の側面もないわけではない。それは7世紀から8世紀にかけて生じたパリンプセスト化である。パリンプセストとは貴重な羊皮紙を経済的に使うための写本のいわばリサイクルである。羊皮紙写本に記されていた古典テキストが時代遅れとみなされて消され、その上にキリスト教関係のテキストが書かれて宗教的な目的に転用されたのである。パリンプセスト化の背景には、羊皮紙が高価になったという経済的な理由もある。だがこの不幸な現象は、すでに古代の異教世界が完全に終焉して完全なキリスト教世界になっていたために古典テキストに対する敬意の念がうすれたために起こったのである。古典における巨人たるキケロやウェルギリウス、オウィディウス、プリニウス、セネカでさえこの現象の犠牲になった。

パリンプセスト化という古典テキストを破壊する恐るべき運命は、ラテン文学を襲っただけではなくギリシア文学も襲った。現在は断片でしか残っていないエウリピデスの悲劇『バエトン』のテキストの上には、

6世紀にパウロの手紙が記された。ソポクレスの劇やアルキメデスの著作もパリンプセスト化の犠牲にされていた。しかし幸いにも18世紀になってから、かつて抹殺された古典テキストが発見されるようになった。そして判読のための試薬も開発され、技術も発達した。

8世紀末になるとカール大帝の文教政策によって古典が庇護され、修道院や司教座聖堂附属学校が設立された。そのおかげで、ラテン文学は活路を得ることができた。カール大帝の宮廷図書館の写本が親写本となって、修道院の蔵書はそこから書写された。その後、10世紀の文化は全体的に停滞し、写本生産もあまりなかったが、11世紀になってモンテ・カッシノ修道院が復興し、11世紀後半から12世紀にかけて膨大な数の重要写本が次々に書かれた。これが12世紀ルネサンスへの布石になったことは間違いない。そしてルネサンスになって、古典はキリスト教や修道院から決別する道を歩み始めるのである。

(5) 過去から学ぶ古典学の未来

古典学の運命を左右してきた要因を通時的に概観してきたが、ここからわれわれは古典学の未来について何を学ぶことができるのであろうか。

なによりもまず強調したいことは、古典の最大の敵は、書物を破壊する火災や戦争である。48年か47年ころにアレクサンドリアのムーセイオンがカエサルによって焼かれたとき、どれほど多くの貴重な本が炎に包まれたであろうか。1204年に十字軍によってビザンティウムの図書館が破壊されなかったならば、われわれの手に残った文献はもっと豊かなものだったはずである。現在では文献は大量生産されている。だがいかに多くの文献があろうとも、核の時代に万一戦争が起これば、すべての文献、ひいては人類が営々と重ねてきたすべての努力が一瞬にして消失する危険がある。平和を維持する行動を一市民としてとることもま

た、古典を守ることにつながるのではないだろうか。

物理的要因について過去の歴史を振り返ると、物理的変化は必ずしもプラスの面をもたらすばかりではなく、マイナスの面も伴っていることがわかる。パピルスが羊皮紙に変わり、卷子本が冊子本に移行したとき、確かにテキストの永続性はかなり保証された。だがその反面、羊皮紙冊子本に転写されなかったテキストは永久に陽の目を見ない運命に陥った。9世紀に字体が大きく変わったときにも、新しい小文字体書き換えられたテキストは生き延びた。だが書き換えられなかったものには、羊皮紙冊子本への転換のときと同様の事態が生じた。

現在ではコンピュータが普及し、電子本も登場し始めている。この変化は、パピルスから羊皮紙へ、大文字体から小文字体への変化以上に大きな変化かもしれない。ひょっとしたらそれは、文字の発明や印刷術の発明に匹敵するような大きな革命かもしれない。われわれは現代のテクノロジーのプラスの面を最大限に活用しつつ、マイナスの面を最小に押さえる努力をしなければならないであろう。

次に宗教的要因について見れば、古典が修道院から解き放たれ、聖職者の占有物でなくなって久しい。キリスト教の古典に対する歴史的使命は、ある意味では、ルネサンスにおいてすでに果たし終えたと思われる。修道院が果たしてきた役割は、すでに大学の手に移されているからである。その意味で現代においては、宗教的要因は社会的要因に吸収されているとみなしてもよいであろう。

そこで社会的要因に目を転じると、古典の保護・継承・発展に寄与してきたのは図書館や大学であった。我が国においては、たとえば大英博物館のような大学とは別個の図書館に古典関係の文献が所蔵されている例はほとんどなく、学術用の書籍はもっぱら大学図書館にあるので、図書館の問題は大学の問題に含めて考えてよいであろう。

ところが今、その大学が大きな転換期を迎えている。大学制度そのものは拡大し、学生や教員数は多くなった。それ自体は喜ばしいことか

もしれないが、とくに日本の場合、学問研究の場としての大学の空洞化が加速度的に進行している。テクノロジーと経済効率とが最優先される社会のなかで、人文科学の評価は決して高くない。日本にとって直接的・伝統的な古典である中国の古典に対しても、明治以来積極的に摂取してきた西洋文明の古典である西洋古典に対しても、十分な敬意が払われているとは決して言えない。

過去の歴史を振り返って得られる教訓の一つは、古典にとって目に見えない最大の敵は古典への無関心だということである。写本製作のなかった時代、すぐれた研究者が出なかった時代は例外なく、文化全体が衰退し、古典への無関心が蔓延していたのである。

古典学の危機とは、とりもなおさず文化全体の危機である。20世紀末日本の知的・社会的状況は楽観を許さないどころか、ますます厳しさを増しつつあるように思われる。日本の西洋古典学あるいは古典学全般は、ある意味では岐路に立っている。

しかし私は古典の未来について悲観も絶望もしたくない。なぜならば、古典は古典そのもののなかにある輝きによって、つまりその内在的価値そのものによって、人類が存続する限り、不滅であると確信するからである。たとえわずかな数であろうとも、古典の真価を理解し、それを希求する人々が途絶えることは決してない。古典は人間の良心の泉であることを止めることはないのだから。そして私自身も世代から世代へと古典を伝達する長い長い鎖のひとつでありたいと願う。

インド暦プログラム PANCANGA について

矢野道雄

(A03「情報処理」班・京都産業大学)

1 はじめに — ヒストリーにかえて

インドの暦は時代と地域による多様性がはなはだしく、また暦のしくみそのものが複雑であるから、古典文献や碑文に記された日付を西暦に変換するのはきわめて厄介な問題である。たとえインドの暦法の原理を知っていても、過去に遡って暦を再現するには数多くの手続きと面倒な計算が必要である。これまではその計算を省略するためにあらかじめ準備された表を用いるのが常であった。代表的な表が Sewell-Dikshit[1896], Schram[1908], Pillai[1922]に見られるものである。しかしこれらの表さえあればインドの暦と西暦の相互変換が一義的に可能になるというわけではなく、さまざまな可能性を考慮に入れられない限り信頼できる結果を得ることはできない。

この問題がいかに困難であるかは、実際にインド古典文献にみられる日付を西暦に変換する作業を行ったものなら誰しも痛感することである。わたしはインド天文学と暦法の歴史を文献学的に研究しているものとして、この作業を軽減する方法を模索していたが、およそ10年前にたまたま Pascal というプログラム言語を学ぶ機会があったので、自分自身でプログラムを書くことを思いついた。その結果、未熟ながら現在の PANCANGA プログラムの前身である TRYANGA ができた。これは私の造語であり、サンスクリットで「3つの部分からなるもの」という意味である。この時点ではインド暦の5つの基本要素のうち「ヴァーラ」

(曜日)、「ナクシャトラ」(月宿)、「ティティ」(太陰日)という3つの要素しか得ることができなかつたからである。

ちょうどそのころ、当時京都大学の大学院生であった伏見誠君がこのプログラムに関心をもち、プログラム改良の協力を申し出てくれた。それ以来わたしはインド暦のひとつひとつの要素をできるだけ古典テキストに忠実に手続き化、関数化することに努め、これを伏見君が全体的な構造の中で有機的に関連付け、位置付け、入力と出力が容易にできるように改良していった。その結果完成したのが文字通り「5つの部分からなる」PANCANGAの第1バージョンであり、このプログラムについては情報処理学会で発表した。(同学会研究報告 91-CH-9(1991年5月)「インド暦のコンピュータプログラム」参照。)

その後、歴史資料でしばしば見られる年代表記である「木星年」の項目を追加したバージョンをPANCANG2とし、MSDOSで実行できるPANCANG2.EXEとそのソースファイルであるPANCANG2.PASを、1994年3月に京都産業大学のftp siteで公開した。公開以来、我々のプログラムは欧米の多くのインド学研究者によって用いられてきた。さらにインド文化圏に属する周辺世界の古い暦の再現にも有効であることは、たとえばインドネシアの碑文の研究者Amrit Gompert氏の報告からも明らかになった。私自身もさまざまな資料の年代決定¹にこのプログラムを用いたが、便利だけでなく、十分に信頼できる結果を得られることがわかった。

しかし最近ではMSDOSを使い続けている人は少なくなり、ほとんどの研究者はWindows95、Windows98あるいはMacOSに移行している。今回科学研究費によってPerlバージョンを準備する計画を立てた最大の理由は、このPerlという言語がOSに依存しないことであり、またCGIで実

¹たとえば徳永宗雄教授の労作 *The Bṛhaddevatā*において使用されたサンスクリット写本のいくつかはこのプログラムで詳細な日付を確認することができた。Muneco Tokunaga *The Bṛhaddevatā*, Kyoto 1997, pp.lvi-lvii 参照。

行することにより、ブラウザを利用できる環境さえあればどのような端末でも同一の計算結果を得ることができることがわかったからである。

そこで上記の伏見誠氏（現在ハーバード大学留学中）に再度協力を要請し、電子メールによってアイデアを交換し、まずプログラム言語を TurboPascal から Perl へと一行ずつ書き換えていただいた。一応の書き換えが終わったところに伏見氏が一時帰国したので、この Perl 版を CGI で実行するためのテストを Windows98 上で行った。そしてできるだけユーザーが実行しやすいプログラムにするためにホロスコープ用のメニューを削除し、使用方法を説明した文章を別に準備することにした。

なおプログラム言語の違いによる計算結果の相違があることがわかったが、これは内部関数、とくに三角関数の精度の違いによるものであり、インド古典天文学書にもとづいた計算結果の精度には影響を与えないと判断することができた。そこでまず、京都産業大学の学生のディレクターを一時借りて、Perl 版の pancanga の動作を確かめ、ハーバード大学に戻った伏見氏にもアクセスしてもらった。セキュリティの問題が起らないよう十分にテストした後、計算機センターの CGI を利用するための正式認可を受け、2月29日に公開し、国際的なインド学のメイリングリスト INDOLOGY にアナウンスした。ホームページのアドレスは <http://www.kyoto-su.ac.jp/~yanom/pancanga/> である。

2 MSDOS版PANCANG2について

MSDOS 版のプログラム PANCANG2 の最初の画面は次のとおりである。

```
***** Pancanga vers.2.0 ***** M. YANO and M. FUSHIMI
```

```
--- Dedicated to Prof. KARASHIMA --- Kyoto, March 1994
```

```
This program is based on the Suryasiddhanta. The constants  
of the text were modified around AD 1000 by the elements called
```

bija. You can choose with or without bija by entering in <S>.

<MENUMES>

- <T>: To find the modern date from the given Indian date. The result is not always correct. (Sometimes error is one month because of adhimasa.) You should confirm it by menu <L>.
- <L>: To find the Indian date (in amanta) from the given modern date. The result is considerably reliable: the month names are almost always correct; only the error of 1 tithi is to be admitted because of occurrence of ksayadina or adhidina.
- <V>: To get the further details of <L>.
- <H>: To get horoscope (at present only lagna).
- <S>: To set local <L> attitude, bija.

Parameter: [file name](in which the output will be saved)

NOTICE ... Remember the difference of amanta and purnimanta.

Beginning of the year is set for Caitra sukla 1.

***** This program should not be used for commercial purposes.

Please contact M.YANO : TEL (075) 705-1781 (direct)

このプログラムは世界のインド学の専門家を念頭においており、日本語の説明は準備していなかったため、この機会にこの第1画面で与えている情報について若干の説明をしておこう。

まず、このプログラムの最大の特徴は、インドで最も影響力の大きかった古典天文学書『スールヤシッダーンタ』に基づいており、現代天文学はいっさい用いていないことである。現代的な要素は内部関数の三角関数だけであると言ってもよい。なぜこの点が重要であるかということ、現代天文学の理論に基づいたプログラムによって過去の暦を作ること自体はそれほど難しいことではないが、そのようにしてできた暦は古代の人々が用いていた暦と同じであるとは言えないからである。古代の暦を

再現するには古代の人々の理論を用いて古代の人々と同じ方法で計算しなければならない。実際インドには今なおそのようなやりかたで暦を製作する伝統がわずかながら生き残っている。このことについては私は1991年に現地調査を行い、その一部を『占星術師たちのインド』（中公新書）で報告した。さらに詳細な報告は1993年12月に東京大学東洋文化研究所で行った。これについては「付録」参照。また最近ではインディラ・ガンジー国立美術センターの副所長からいただいた1997年のある地方のパンチャーンガは私のプログラムの結果と年間を通じて一日たりとも異なっていなかった。

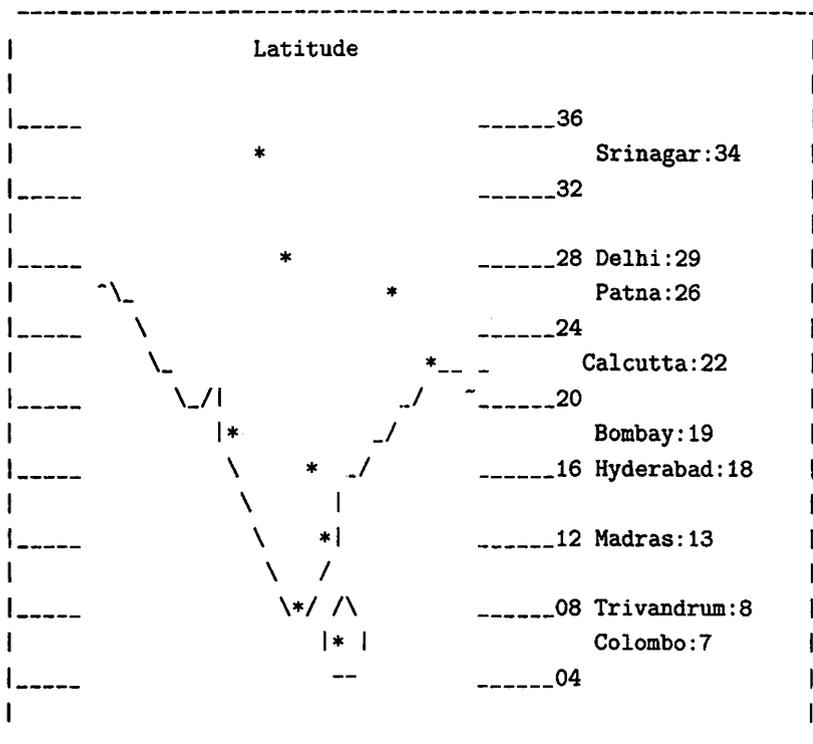
しかし伝統的な暦の装いで *Pañcāṅga* という名前で駅や寺院の売店で売られている暦であっても、現代天文学に基づいているものが多く、そのような暦とわたしのプログラムとでは日付が1日ずれるケースが年に数度起こるのが普通である。とくに古典インド天文学では月の「出差」(evection) を考慮に入れないので、その影響が最も顕著な上弦と下弦の日の近くでそのようなずれが起こりやすい。逆に、朔(新月)と望(満月)のあたりで両者の日付は一致することが多い。

このようにほぼ純粋に「古典テキストに基づいたプログラム」であるというのが私のプログラムの特徴である。最近ではインドでもコンピュータが普及し、暦や占星術にも応用されているが、プログラマーたちは、古典天文学書に書かれているアルゴリズムを用いて昔ながらの方法で計算して作られた暦が現にインド各地で生産されているということ、さらに、その同じアルゴリズムをそのままプログラム言語に書き換えてコンピュータに計算させても結果はほとんど同じであるということにはあまり関心をもっていないようである。なぜなら、かれらにとって重要なのは「正確な現代の暦を作ること」であり、「古代の暦を正確に再現すること」ではないからである。

さてまずこの画面では、このプログラムが古典天文学書『スールヤシッターンタ』に基づいていることを宣言した後、西暦10世紀ごろにこ

のテキストの天文定数が改善されて「बीジャ」(bija)という要素が付け加えられるので、「बीジャ」を考慮に入れるか入れないかを環境設定メニュー<S>のによって選択することができると述べている。さまざまな資料で試みると、およそ西暦1000年以後の暦を再現したい場合には<with bija>を選んだほうが実際の暦に近いことがわかる。

またインドの暦では日出が一日の始まりであり、伝統暦では日出における暦の要素を与えるのが普通なので、まずこのプログラムを適用する土地の日出の時刻を求めておかなければならない。これは「標準時」ではなく「地方時」であるから、その土地の経度には関係しない。(逆に言えばインドで現在用いられている標準時に換算するためには標準時の基準となっている土地の経度とその土地の経度の差を求める必要がある。)しかし日出の時刻の計算にはその土地の緯度が必要である。そこでユーザーはまず土地の緯度を入力することを要求される。このプログラムではインドの主要な都市のおよその緯度を知るために環境設定メニュー<S>の<L>を設け、次のような画面に移ることができる。もちろん必要なのは緯度だけであるから、インドである必要はない。当初緯度は正の数つまり「北緯」のみと設定していたが、上記のAmrit Gompert氏の希望で負数によって「南緯」も扱えるようにした。



ここで土地の緯度を入力した後、さらに次の4つのメニューのいずれかに進むことになる。

<T> インドの暦日が与えられているとき、西暦に変換する。この結果はプログラムの性質上必ずしも正確とは言えない。つまり、閏月が生ずる年の場合は1月ずれる可能性があるし、欠日や余日の配置の違いにより、1日のずれが起こることも多い。したがってこのメニューの結果が正しいかどうかを次のメニューによって確認することが必要である。

<L> 西暦の日付が与えられているとき、インド暦に変換し、10日分を1画面とし、何かキーをたたくとスクローしていく。このメニューの信頼性はきわめて高い。

<V> このメニューでは、惑星の位置も含めたインド伝統暦のさらに詳しい要素が1日ごとに得られ、何かキーをたたくとスクロールして次の日になる。このメニューについては後で詳しく述べる。

<H> インドの伝統暦はホロスコープを作るためにも用いられる。そのためにはまず所与の時刻の東の地平線上に上昇しようとしている点(ラグナ、Iagna)を求める必要がある。そのためのメニューである。

ここでメニュー<T>,<L>,<V>の実行結果の例をあげよう。まず、メニュー<T>を選ぶと、次のような画面になる。[]はユーザーが入力する部分である。

0(11).Caitra	1(0).Vaisakha	2(1).Jyaistha	3(2).Asadha
4(3).Sravana	5(4).Bhadrapada	6(5).Asvina	7(6).Karttika
8(7).Margasira	9(8).Pausa	10(9).Magha	11(10).Phalguna

Saka years expired: []

If purnimanta and krsna-paksa, enter the number in brackets

Enter masa by the number: []

Sukla- or Krsnapaksa ? ...s/k []

Enter tithi by the number 1 to 15: []

そこで例えば、

Saka years expired:[1922]

Enter masa by the number: [0]

Sukla- or Krsnapaksa ? ...s/k [s]

Enter tithi by the number 1 to 15: [1]

と入力すると、次のような答えが得られる。

Saka 1922 Caitra Suklapaksa 1 | AD 2000 4 5 Wednesday

そこで、メニュー<L>に移り、<2000 4 5>と入力すると、

2000	4	5	Wed		Saka 1922	Caitra	Suklapaksa	1	(0.28)	Revati
2000	4	6	Thu		Saka 1922	Caitra	Suklapaksa	2	(0.33)	Asvini
2000	4	7	Fri		Saka 1922	Caitra	Suklapaksa	3	(0.40)	Bharani
2000	4	8	Sat		Saka 1922	Caitra	Suklapaksa	4	(0.49)	Krttika
2000	4	9	Sun		Saka 1922	Caitra	Suklapaksa	5	(0.59)	Rohini
2000	4	10	Mon		Saka 1922	Caitra	Suklapaksa	6	(0.70)	Mrgasira
2000	4	11	Tue		Saka 1922	Caitra	Suklapaksa	7	(0.81)	Ardra
2000	4	12	Wed		Saka 1922	Caitra	Suklapaksa	8	(0.92)	Pusya
2000	4	13	Thu		Saka 1922	Caitra	Suklapaksa	10	(0.03)	Aslesa
2000	4	14	Fri		Saka 1922	Caitra	Suklapaksa	11	(0.12)	Magha

という画面になり、双方向から、西暦2000年4月5日(水曜日)がインド暦のシャカ紀元1922年チャイトラ月の白分第1日に当たることが確認できる。ちなみにインドではふつうチャイトラ月の白分第1日が年の初めでもある。なおこの表で、Suklapaksa 8 (白分8日)の次の日がSuklapaksa 10(白分10日)になっていることに注目されたい。この月後は説明するように、「白分9日」は「欠日」なのである。たまたまわたしの手元にあるベナレスサンスクリット大学発行の今年の*Pañcāṅga*²でもこの日は欠日である。

ただしここで得られる月名は「晦日終り」の方式である。月の名前に関してインドでは「晦日終り」(amānta)と「満月終り」(pūrṇimānta)がある。白分(朔から満月まで)の名前は共通であるが、黒分(満月の翌日から晦日まで)は方式のちがいによって月名がひとつずれる。たとえば

²この*Pañcāṅga*を提供していただいた京都産業大学山上證道教授に感謝します。

「晦日終り」の「チャイトラ月黒分」は「満月終り」の「ヴァイシャーカ月黒分」である。おおまかに言えば、北インドでは「満月終り」南インドでは「晦日終り」が多い。したがってメニュー<T>でも「黒分」でしかも「満月終り」の場合は（ ）内の月名を用いるようにと注意を促している。

なお後で述べるようにインド独特の「欠日」(kṣayadina)「余日」(adhidina)の配置は微妙に違うことがあるので、1日の誤差は許容範囲である。1日ずれる場合は後で述べるようにティティ(tithi)の端数がゼロまたは1に近い時であり、この端数は各行の（ ）の中に書かれている。しかしいくらずれても日付が2日以上ずれることはない。なおこのメニューの最後にあるのは月が位置する宿(ナクシャトラ)である。

この日のさらに詳しい暦要素はメニュー<V>によって得られ、次のようになる。

AD 2000 4 5.00 | JD(at noon): 2451640 | Kali-Ahargana: 1863174 | Wednesday

Pancanga based on the Suryasiddhanta (at sunrise) local latitude = 29.00

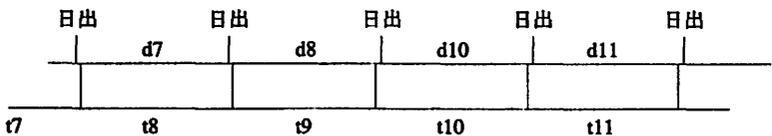
Indian date (amanta) (*) local sunrise... 5h 49m
 year(atita):Saka 1922 |Vikrama 2057 |Kali 5101 |Jovian(North):vijaya(27)
 month/paksa..... Caitra Suklapaksa |Jovian(South):vikrama(14)
 tithi (at sunrise)... 1 (fraction = 0.281)
 nakshatra.... Revati / karana...kiMstughna / yoga...vaidhRti

NOTICE: if PURNIMANTA K-paksa month names appear a month earlier

	Nirayana	Mean Longitude	True Longitude	Month Names
Sun	11s 19d 28 46	11s 21d 40 48		
Moon	11s 29d 55 47	11s 25d 3 1		Caitra Asvina
Mercury	11s 19d 28 46	10s 27d 10 40		Vaisakha Karttika
Venus	11s 19d 28 46	11s 5d 13 56		Jyaistha Margasirsa

Mars	0s 19d 24 33	0s 14d 28 30	Asadha	Pausa
Jupiter	0s 19d 33 50	0s 16d 43 48	Sravana	Magha
Saturn	0s 28d 21 29	0s 20d 58 36	Bhadrapada	Phalguna
Candrocca	8s 14d 4 10			
Rahu	3s 6d 39 42			

ここでは *Pañcāṅga* の5つの要素の他に、年代学の重要な情報が得られる。まずJDは暦法でも年代学でもよく用いられる「ユリウス通日」である。インド天文学でもこれに似た概念を用い、「カリユガ」の第一日(B.C. 3102年2月18日)からの積日 (ahargaṇa) を暦計算に用いる。この第2行目には採用した土地の緯度が29.00度であることが示されている。第3行目はこのプログラムが「晦日終り」方式を採用していること、およびこの日のこの緯度での日出が地方時の5時49分であることを示している。第4行目から、シャカ紀元、ヴィク라마紀元、カリユガ紀元による年数がわかる。シャカ暦とヴィク라마暦はちょうど135年の差がある。なおJovianとあるのは「木星年」のことであり、60年をひとつの周期とし、それぞれの年に名前が付けられている。北インド方式と南インド方式があるが、とくに南インド方式が碑文などでよく用いられる。5行目には月名と「白分」(Suklapaksa)と「黒分」(Kṛsnapaksa)の区別が見られる。6行目の tithi(at sunrise)... 1 (fraction = 0.281) は、「ティティ」と、日出時のその端数である。「ティティ」はインド独特の時間単位で、簡単にいえば1朔望月の1/30であるが、正確には太陽と月の離角が12度になる時間である。この端数が1に近ければ日出のすぐ後に「ティティ」の変わり目を通過することになる。この変わり目が「欠日」の発生と密接な関係があることは次の図を見れば理解できるだろう。



ここで tn はその半月の n 番目のティティを、 dn は n 番目の暦日であることを示す。インドの暦日は「ある日の日出の瞬間に進行中のティティの番号をその日の暦日番号とする」と定義される。この図では $t8$ が終る直前に日出があるので、この日出から次の日出までは「8日」($d8$)と定義される。しかし日出の直後に $t8$ から $t9$ へ変わり、そして同じ日のうちに $t9$ が終っている。したがって定義上、次の日出からは「10日」($d10$)になり、こうしてこの半月は「9日」が「欠日」となるのである。またこれとは全く逆に、一つのティティが二つの日出を含むことがある。その場合は同じ日付が繰り返され、「余日」と呼ばれる。「付録」の表の中で、() の日付がそれである。

次に重要な要素は「ナクシャトラ」である。インド人は古代から月がどの恒星の近くにあるかに深い関心をもっていた。初期においては不等間隔28の恒星を選んで月の位置の目安としていたが、後に等間隔の27の「ナクシャトラ」が一種の座標として用いられるようになった。したがってインドの暦の「ナクシャトラ」は実際の恒星とは必ずしも一致しない。たとえば上の2000年4月5日の例では月は $\langle 11s\ 25d\ 3\ 1 \rangle$ (=355度3分1秒) のところにあるから、第27番目の宿 (Revati) に位置することになる。上に述べたように、月がどのナクシャトラにあるかはメニュー $\langle L \rangle$ でも示している。

残りの二つの要素「カラナ」(karaṇa)と「ヨーガ」(yoga)も占星術の要素である。「カラナ」はティティの半分の長さである。つまり1朔望月は60のカラナからなり、それぞれに名前がついており、吉凶がある。「ヨーガ」は太陽の黄経と月の黄経の和(ヨーガ)が13度20分になる単位である。和が360度になればまたもとに戻るから、合計27種類のヨーガがあることになる。これも吉凶と関係している。

なおメニュー $\langle V \rangle$ ではさらに惑星の平均位置と真位置が得られるようになっている。これは現代の多くの *Pañcāṅga* で半月の初めと真中の惑星の位置が与えられており、それらがどのような方法で計算されたもの

であるかを知るための目安として、『スールヤシッダーンタ』の方法による結果を示したものである。惑星の平均位置は時間の関数であるから、これを求めるためには三角関数は必要ではない。これをここに加えたのは、歴史文献に惑星の位置が与えられているとき、それが平均位置であるか真位置であるかの確認を容易にするためである。

なおインドの月名を覚えることが容易でないユーザーのために、月名のリストが添えてある。

3 Perl版pancangaについて

今回公開したPerl版pancangaは、上に述べたようにMSDOSのTurboPascal用のプログラムを忠実にPerlに移植したものであり、天文学・暦法上では何らの変更も加えていない。上にあげた2000年4月5日の例をPerl版で実行すると、メニュー<V>は次のような結果になる。

AD 2000 4 5 JD (at noon) = 2451640 Wednesday

Pancanga based on the Suryasiddhanta (at sunrise) local latitude = 29

Nirayana	Mean Longitude	True Longitude	Month Names
Sun	11s 19d 28' 46"	11s 21d 40' 42"	
Moon	11s 29d 55' 48"	11s 25d 4' 6"	Caitra Asvina
Mercury	11s 19d 28' 46"	10s 28d 3' 29"	Vaisakha Karttika
Venus	11s 19d 28' 46"	11s 5d 49' 44"	Jyaistha Margasirsa
Mars	0s 19d 24' 33"	0s 14d 55' 38"	Asadha Pausa
Jupiter	0s 19d 33' 50"	0s 16d 45' 0"	Sravana Magha
Saturn	0s 28d 21' 29"	0s 20d 59' 33"	Bhadrapada Phalguna
Candrocca	8s 14d 4' 10"		
Rahu	3s 6d 39' 42"		

Indian date (amanta)

(*) local sunrise... 5h 49m

year(atita):Saka 1922 |Vikrama 2057 |Kali 5101 |Jovian(North):vijaya(27)

month/paksa..... Caitra Suklapaksa [Jovian(South):vikrama(14)
tithi (at sunrise)... 1 (fraction = 0.282)

naksatra.... Revati / karana...kiMstughna / yoga...vaidhRti

NOTICE: if PURNIMANTA K-paksa month names appear a month earlier

レイアウトは少し変えたが、本質的な変化ではない。水星、金星、火星の真経度はすこし異なっているが、その他の惑星の真経度はほぼ同じである。太陽と月の真経度の場合も差はほとんどないので、暦法上はほとんど問題がないと言って差し支えない。真経度の違いはプログラム言語の内部の三角関数の精度の相違が累積していった結果であると思われる。上に述べたように、惑星の平均位置の計算には三角関数は用いられないから、両プログラムの平均位置 (Mean Longitude) は同一の結果になっている。

ただしCGIで実行するためには遠隔地でブラウザを使っているユーザーが容易に入力できるようなページを作っておく必要がある。これも伏見君が準備してくれた。これをWindows98にインストールしたcgi-binに置いてオフラインで実際に走らせ、できるだけ使いやすい画面になるように工夫した。その結果、このプログラムの本来の目的は歴史資料の年代確定の補助手段を提供することであるから、ホロスコープのメニューは不要であると判断して、これを削除した。またオプションやメニューの選択についてはhtmlスクリプトのボタン機能を使用できるようにし、土地の緯度や月名に関しては選択肢からセレクトできるようにした。

さらに初めてこのプログラムを使用するユーザーのために説明文を別ファイルで準備し、タイトルのすぐ隣に*Readme first before using this program*としてここでリンクさせた。

ここまですべてWindows98の上でテストした後、いよいよオンラインでネットワークを通じてこのプログラムにアクセスするためのテストを行うことにした。そのためにすでに京都産業大学の計算機センターでCGI実行権をもっている学生坪内哲也君のディレクトリを一時借用した。まず

なによりもセキュリティが重要なのでディレクトリの属性や実行権限などを十分に確かめた。またこのような実行プログラムは巨大な桁数の数値を入力された場合ハングアップする可能性もあるので、そのような数値は受け付けないように設定した。こうして十分に安全性を確認した後、2000年2月29日という暦法上で珍しい日にこのプログラムを公開したのである。

付録 インド暦の多様性

わたしは1991年にインド各地でおよそ50種類のパンチャーンガを集めた。それらを比較した結果きわめて多様であることがわかった。たとえば次の表に示すように、同じ1ヵ月をとりあげただけでも、「欠日」と「余日」の組合せが11通りあることがわかる。たまたまこの月は同じパターンを示している二つの暦が別の月では異なるという場合があるから、年間を通じて全く同一という暦はないと言ってもいいくらいである。現代でもこのような状態であるから、古代においてそうでなかったとは決していえない。しかしまた上にのべたようにいくらずれても2日以上ずれることはない。だからこそ『スールヤシッターンタ』に基づいて作った暦のプログラムが威力を発揮するのである。以下に例として取り上げた「シャカ暦1913年カールッティカ月」を基準にして収集した暦を分類してみよう。

なおAは「晦日終り」 P_1 と P_2 は「満月終り」である。なお「満月終り」は閏月の挿入の仕方の違いで二種類に分けられる。また「カールッティカ月を年初とする暦(Kārttikādi)では前の月でこの年の分が終っているので比較の対象にならなかった。これらの暦のうちf3は年間を通じて pancanga プログラムと全く同じ結果であった。

a: Mashhūra 'āma[Delhi] (Urdu)

b: (1)Nirṇayasāgar(P_1)[Neemuch Cantt, M.P]

- (2)Śrīdharaśivalāla(P₁)[Ajmer]
 (3)Śrīvallabha Manīrāma(P₁)[Bombay]
- c1: (1)The Indian Astronomical Ephemeris(P)(Government of India)
 (2)Rāṣṭrīya Pañcāṅga (Government of India)
 (3)Dṛksiddhānta(P₂)[Benares Skt. Univ., Varanasi]
 (4)Cintāharaṇa(P₂)[Varanasi]
- c2: (1)Āryabhaṭṭ(P₁)[Delhi], (2)Mārtanḍa(P₁)[S.D.Sarma, Hoshiarpur]
 (3)Date Bṛhat(A)[Pune]
- c: (*Kārttikādi*, Gujarati): Sandeśapratyakṣa(A)[Ahmedabad]
- d1: Viśva(P₂)[Benares Hindu Univ., Varansi]
- d2: (1)Kṛṣṇamurarimīśra(P₂)[Lucknow],
 (2)Veṅkateśvara-Śatābdi(P₁)[Bombay]
 (3)Daśavārṣika Śrī Sarasvatī(P₁)[Jaipur]
 (4)Niraṇayasāgar(A)[Bombay]
 (5)Ṭakurprasāda(P₂)[Varanasi] (Wall-hung)
 (6)Kāladarśaka(P₁)[Mathura] (Wall-hung)
- d3: Kūrmāñcaīya(P₂)[Nainital]
- d4: Śatavarṣa Pañcāṅga[Kotthayam, Malayalam]
- d5: Singhalese[Sri Lanka]
- d6: Bhuvaneśvarī(A)[Gondal, Gujarati],
- d: (*Kārttikādi*, in Gujarati): Vārāhī(A)[Jamnagar], Śuddha(A)[Ahmedabad],
 Khagolasiddhasūkṣma(A)[Bombay]
- e1: (1)Rameśvaradatta(P₂)[Varanasi]
 (2)Vratotsava(P₂)[Bareilly, UP]
- e2: (1)Gaṇeśa(P₂)[Varanasi], (2)Gaṇeśa āpā(P₂)[Varanasi]
 (3)Hṛṣīkeśa(P₂)[Varanasi], (4)Rameśvaranātha(P₂)[Varanasi]
 (5)Nepāladeśīya(P₂)[Kathumandu, printed in Varanasi, *Vaiśākhādi*]
- e3: Butanese(A) [Thimpu]

- f1: [Tamil and Telgu Calendars]
- f2: (1)Ānandabhāskara(P₁)[Lucknow]
(2)Vaidyanātha(P₂)[Nagpur]
(3)Viśvavidyālaya(P)[Darbhanga, Śrāvaṇādi]
(4)Mithilā Viśva (P)[Mithila, Śrāvaṇādi]
- f3: Badrakālī(P₂) [Almora],
- f4: Tibetan(A) [Kinnaur, H.P]
- g: P.T. Pani(A)[Madras, Tamil]

シヤカ暦1913年アイシュヴィナ／カールツティカ月

西暦 1991年	a	b,c2 d2	d6	c1	d1,f2	d4	d5	e1	f1	d3,e2 f3 g	e3 f4
10/23	Āś○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
24	Āśk1	k1	k1	k1	k1	k1	k1	k1	k1	k1	k1
25	(Kā)2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
26	3[4]	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
27	5	4[5]	4[5]	4[5]	4	4	4	4	4	4	4
28	6	6	6	6	5	5[6]	5	5	5	5[6]	5[6]
29	7	7	7	7	6[7]	7	6	6[7]	6[7]	7	7
30	8	8	8	8	8	8	7[8]	8	8	8	8
31	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9
11/1	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
2	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11
3	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12
4	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13
5	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14
6	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
7	Kā s1	s1	s1	s1	s1	s1	s1	s1	s1	s1	s1
8	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
9	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
10	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
11	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
12	6	6	6	6	6	6	(5)	6	6	6	6
13	7	7	7	7	7	7	6	7	7	7	7
14	8	8	8	(7)	8	8	7	8	8	8	8
15	9	(8)	(8)	8	9	(8)	8	9	9	9	9
16	(9)	9	9	9	10	9	9	10	(9)	10	10
17	10	10	10	10	(10)	10	10	(10)	10	(10)	11
18	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	12
19	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	13
20	13	13	13[14]	13	13	13	13	13[14]	13	13[14]	14
21	14[○]	14[○]	○	14[○]	14[○]	14[○]	14	○	14[○]	○	○
22	Kā k1	k1	k1	k1	k1	k1	○	k1	k1	k1	k1
23	(Mā)2	2	2	2	2	k2	k1[2]	2	k2	2	2

- 注 1 () 内の月名は満月終り (pūrṇimānta)
 2 sは白分 kは黒分
 3 ●は朔、○は望
 4 []内の数字は欠日、()内の数字は余日

古典和歌における表現分析の新技术

—類似歌発見のために—

南里一郎 (純真女子短期大学)

福田智子 (福岡女学院大学)

竹田正幸 (九州大学)

(B02「伝承と受容(日本)」班)

1 研究の背景

和歌を成り立たせる要素を、「心」と「詞(ことば)」とに分けるという考え方がある。たとえば、藤原定家『毎月抄』には、作歌の心得として、以下のような記述が見える¹。

さて、「心をさきにせよ」と教ふれば、「詞を次にせよ」と申すに似たり。「詞をこそ詮とすべけれ」といはば、また「心はなくとも」といふにて侍り。所詮心と詞とを兼ねたらむをよき歌と申すべし。心・詞の二つは鳥の左右のつばさの如くなるべきにこそとぞ思う給へ侍りける。

ここでいう「心」とは、歌を作る主体(歌人)の感動や実感であり、また「詞」は、いわゆる表現である。歌人は、「心」をもとに「詞」を獲得することで、一首の歌を作る。本研究は、作歌の際に「鳥の左右のつばさの如く」重要な「心」と「詞」のうち、「詞」をその対象とする。

¹日本古典文学全集 50『歌論集』(橋本不美男・有吉保・藤平春男校注・訳、小学館、1975年)。

古典和歌に用いられる表現は、きわめて保守的である。歌ことばのそれぞれが、伝統的に付与された独自のイメージを持ち、そこから逸脱した詠み方は、まず許されない。また、枕詞や掛詞などの定型化した修辭法も踏襲しなければならない。歌人たちは、こういった基礎知識を踏まえたうえで、作歌にのぞむことになる。その作歌の規範となるべく、十世紀初頭に編纂されたのが、初めての勅撰和歌集『古今和歌集』であった。これ以後のいかなる歌人も、多かれ少なかれ『古今集』歌の影響下で歌を作っていくことになる。従って、この作歌の規範が、いかに継承され、また変容していくかを探るために、表現の類似する歌をさまざまな角度から収集し、分析することは、古典和歌表現史における重要な柱のひとつとなるのである。

さて、そのような古典和歌の、表現の類似性を分析するにあたり、まず着目されるのは、名詞や動詞を中心とする自立語であろう。これらの語は、表現の素材となり、「梅に鶯」「紅葉と鹿」のように、特定の組合せで用いられる。こういった規則を修得することは、作歌の基礎であり、近年相次いで上梓された「歌ことば辞典」類²にも、まとまった成果を見ることが出来る。

しかし、和歌は自立語のみで成り立っているのではない。自立語と自立語とを連繫させ、一首の和歌にまとめあげるという役割は、助詞・助動詞(付属語)が担う。にも関わらず、和歌の表現の研究は、もっぱら歌の素材を扱い、言い回しを採り上げたものは、必ずしも多くはない³。

現在、和歌研究者が類似歌を収集しようとする時、まず使用するのは、『新編国歌大観』(角川書店、1983-1992年)である。この10巻20冊の本

² 『歌ことば歌枕大辞典』(角川書店、1998年)、『歌枕歌ことば辞典増訂版』(片桐洋一、笠間書院、1999年)。

³ 『歌ことば歌枕大辞典』において、「ものにぞありける」といった句の言い回しを項目に立てたのは、画期的なことである。

は、古典和歌を網羅的に収めた上に、各句索引を備えている⁴。この索引は、句ごとに類似する歌を検するには便利である。しかし、句頭の文字から五十音順に配列されているため、句頭にくる自立語におのずと焦点が絞られることになる。従って、句頭にこない自立語の検索ができないばかりか、付属語に負うところの大きい言い回しにまで目配りできないのである。そもそも、意味を担わない付属語は、それ自体が一首の歌の骨組みを形成していても、研究者の記憶に残りにくい。従って、研究の糸口が、経験や勘からは、なかなか得られないのである。

だが、ここで想起したいのは、助詞・助動詞研究そのものが、中世歌学における「てにをは」研究を、その発端とするということである⁵。それが、助詞・助動詞の他、動詞・形容詞の活用語尾やその他の語を含んだものであったにせよ、「てにをは」が、作歌の心得を説くために採り上げられたことには、あらためて注意を払うべきであろう。そして、後世、助詞・助動詞の組織的研究を行った富士谷成章(1738-1779)の『脚結抄』(1778)も、そもそも和歌研究の延長線上にあるものであった。さらに、成章の子、御杖に至り、助詞・助動詞に注目した具体的な作歌の作法書が書かれる。その『和歌いれひも』(1794)の序には、次のような記述がある。

おほよそ歌よみはじむる人は、思ひせばく、心、一首をむすぶちからなければ、歌ごとにをれくだけ、くだくだしきやうにのみなりいづべし。我、この年ごろ、その故をば、かつ見、かつ思ひ集むるままに、一首の脚結うちあはで、ととのほざるによれりとは知りぬ。されば、古人おもひをふるまひ、詞

⁴一首の歌を、5-7-5-7-7という五句に分割するという発想は、たとえば、富士谷成章の『和歌梯』(1794)の他、つとに見られる。

⁵頭昭『袖中抄』、順徳院『八雲御抄』、藤原定家『下官集』・『愚秘抄』、藤原基俊『悦目抄』、阿仏尼『夜の鶴』など。

をととのへ、姿をみがかれたる歌どもの、脚結をばかり用ゐて、さながらに名装挿頭、ころころにその間々にはへてよみならはせんとて、この書はつくれり。みづからいでぬちからをいれ、なき手をいだして、ゑせ歌をのみよみ苦しむより、ひたすらこれをならはむは、一首十首にまさるべし。

初心者は、「脚結」すなわち助詞・助動詞の使い方が整わないからよい歌がなかなか詠めない。そこで、優れた古歌から「脚結」だけを抜き出して用い、残りの部分を補って稽古をせよというのである。それは、たとえば、次のような方法である。

はるのひの/ひかりにあたる/われなれど/かしらのゆきと/なるぞわびしき
『古今集』8番

↓

○○○○の/○○○に○○る/○○なれど/○○○○○○と/○○ぞ○○○○

↓

やまかはの/きしねにあまる/みづなれど/やよひをときと/おとぞかれゆく

『古今集』の歌から、歌の骨組みをなす助詞・助動詞、および用言の活用語尾などを抜き出し、その余白(○印の部分)に自立語を入れれば、おのずと整った歌が詠めるというわけである。

成章にも、『和歌梯』(1794)という作歌稽古の書がある。だがそれは、古歌を句ごとに分断したものを、それぞれの題にグループ分けし、その中の句をつなぎ合わせて新たな歌を作る稽古をするという趣向であった。従って、自立語を重視し、歌ことばの伝統の継承と修得とをねらったものと見られる。これに対し『和歌いれひも』は、父の示した稽古法を、付属語を中心とする言い回しから補おうとしたものと位置づけることができよう。

このように、助詞・助動詞の使い方は、歌作する上で、古来、避けて通れない問題であった。とするならば、そこに古典和歌の作歌のポイント、言い換えれば、類似歌を見出す鍵が潜んでいると考えるのも、あながち的外れではないだろう。つまり、和歌の類似性を指摘し、表現の影響関係⁶を明らかにするには、伝統的な歌ことばの組合せとともに、付属語が形成する言い回しの類似性をも視野に入れる必要があるのではないか。

本研究では、以上述べてきた付属語重視の観点を踏まえ、これまで見過ごされてきた類似歌を発見する手法を確立することを、主な目的とする。

2 研究の着眼点とこれまでの成果

2.1 従来 of 検索方法

古典和歌に限らず、表現の分析には、まず、総索引を作成することが常套手段である。総索引とは、作品中に生起する単語を見出し語とし、品詞情報等とともに、その語の作品中での生起箇所、あるいは和歌の場合には歌番号を列記した索引をいう。この作成のためには、文または和歌を単語に分割し、各々の品詞や活用形等を決定するという作業が必要である。このような統語的情報を表すタグを埋め込んだ機械可読テキストを、タグ付きコーパス (tagged corpus) という。総索引は、このコーパスから切り出した語を五十音順に整列して得られるから、総索引のもつ情報は、本質的に、すべてコーパス中に含まれると言ってよい。一方、単語の生起順序等の情報は、コーパスを総索引の形に変換した時点で失われてしまう。したがって、旧来の総索引にこだわらず、コーパスそのものを相手にした、計算機による有効な処理方式を探っていくことが重要

⁶ここでは、作歌の際、意識的に念頭に置かれた歌はもとより、無意識のうちに作歌の糧とされたと思われる歌をも、広く「影響関係」と見なす。

である。

そこで、このタグ付きコーパスの作成について考えてみよう。もし、『新編国歌大観』に収められた45万首すべてを正確に読み解き、単語に分割する基準を首尾一貫させることができるならば、これほどすばらしいことはない。だが現実には、1語で二つの意味を担う掛詞の処理や、複合語の扱いをどうするかなど、問題は数多い。一首の歌の解釈に行き詰まることすらある。たった一つの歌集に対する作業さえ容易でないことは、著者らを含め、実際に試みたことのある者が共通してもつ実感であろう。

一方、計算機によって文の単語分割を行い、品詞等の統語的情報を付与するいわゆる形態素解析の研究は、自然言語処理の分野で古くから行われているが、精度が低く、実用レベルには程遠い。そもそも、人手を用いてさえ上述のような困難があるのであれば、計算機プログラムにとってはなおさらであって、労力の軽減などは望むべくもない。

そこで、現時点においては、単語分割を行わずに目的を達成するための方策を講じなければならない。たとえば、『新編国歌大観』CD-ROM版付属の検索ソフトウェアは、総索引の代替品として、和歌の部分文字列検索の機能を備えている。すなわち、目的の単語と同形の文字列を探索できるため、得られた結果を人手で絞り込むことによって、必要な用例を得ることができるのである。本研究でも、これと同様に、付属語と同形の文字列は付属語として扱い、そのために生じる問題は最終的には人間に委ねることにする。しかし、付属語のなす言い回しを扱う際には、一首の和歌における、付属語の生起する順序等が重要であるため、この付属ソフトウェアのもつ機能だけでは不十分である。実際、このソフトウェアでは、検索時に指定できる論理式の形式もきわめて簡単なものに制限されており、また、順序の指定等はできない。そこで、まず、そのような要求に応えるべく、よりきめ細かな検索機能を備えたツールを作成

した。このツールは、汎用テキストデータベース管理システム SIGMA[1]に基づくものであり、非常に有用である。

2.2 検索から発見へ

ところで、これまでの議論は、研究者が任意の表現にまず注目し、次にその用例を収集する、といったシナリオを前提としていることに注意されたい。上述のツールも、そのような過程で威力を発揮するものである。そこでは、研究者がどのような歌もしくは表現に着目するかが、研究の成否を分ける鍵となる。ところが、先に述べたとおり、付属語は意味を担わないため、それ自体が一首の骨格を形成していても、研究者の記憶に残りにくい、という事情があった。そこで、もし、この着目すべき歌や表現について、計算機プログラムが何らかの指針を与えてくれたとすれば、そこから研究の糸口が得られることも期待できる。情報科学の一分野として最近誕生し、注目を集めている発見科学 (Discovery Science)⁷は、まさにこのような形での研究支援を目指すものである。この点に関して、著者らは、後に述べるように、付属語のなすパターン⁸の自動抽出法や類似歌の自動抽出法を開発している。

さて、本研究では、和歌の 5-7-5-7-7 の各句それぞれを、単語の区切り等は無視して、単なる文字の連鎖と捉え、付属語と同形の文字列も付属語と区別せず扱う。ここでは、たとえば、次の歌に見える二つの「らむ」を区別しない。

さかざらむ/ものならなくに/さくらばな/おもかげにのみ/まだきみゆらむ
『亭子院歌合』3番

⁷ 文部省科学研究費補助金特定領域研究 (A) 「巨大学術社会情報からの知識発見に関する基礎研究」(平成 10~12 年度、領域代表者: 有川節夫)。

初句と結句とについて、単語に分解してみると、

(初句) さか-ざら-む

(結句) まだき-みゆ-らむ

となり、これら二つの「らむ」は別物であることがわかる。しかし、ここでは単語としての性質の違いは問題にしない。両者の意味は違っても、一首の中に二つの「らむ」が存するというのは、いわゆる「同文字病」であり、この歌合の判詞にもその点が指摘されている⁸。つまり、一首の歌を文字列として見ることは、総索引によっては得にくい、実際の作歌の心得に近づく可能性を秘めているのである。

この観点によって、著者らは、五つの歌集を対象に、付属語(と同形の文字列)の形成するパターンを自動抽出し、その分析を行った [8, 5]。取り扱った歌集は、次のとおりである。

- (1) 古今集 922年頃成立の勅撰集
- (2) 新古今集 1205年成立の勅撰集
- (3) 山家集 西行法師(1118-1190)の私家集
- (4) 壬二集 藤原家隆(1158-1237)の私家集
- (5) 拾遺愚草 藤原定家(1162-1241)の私家集

パターンの「良さ」の基準は、最小記述長 (Minimum Description Length; MDL) 原理 [2] に基づいて定めた。抽出パターンをこの基準に照らして整理すると、上位には、典型的なパターンが含まれていた。たとえば、『古今集』の場合、古今集時代特有の助動詞「べらなり」を含む「*ければ*べらなり*」という表現や、「*ぞ*しかりける*」「*こそ*りけれ*」といった係り結び、また、反実仮想「*りせば*らまし*」が、パターンとして浮上した。また、中位には、必ずしも自明でないパターンが多くみられた。

⁸ 「左(当該歌)はらむといふことふたつあり」というのは、欠点の指摘であると読み取れる。

- (1) 古今集 *らむ*しものを*
 *ならば*まし*
 *とも*らじ*
 *じ*とも*
 *は*にして*
- (2) 新古今集 *こそは*め*
 *の*ければ*
 *ば*ばかりぞ*
- (3) 山家集 *まし*かりせば*
 *いかに*らん*
 *ばやは*べき*
 *けりな*たれば*
 *さへ*かな*
 *と*ばかりぞ*
- (4) 壬二集 *とだに*らする*もがな*
 *も*ぬべし*
 *ても*かな*
 *きにけらしな*るまで*
- (5) 拾遺愚草 *とや*けん*

中でも『山家集』の「*ばやは*べき*」はたいへん珍しく、『新編国歌大観』を検しても、他には藤原重家(1128-1180)の私家集『重家集』にしは見られないパターンであった。

さらに、五つの歌集からそれぞれ抽出された上位のパターンについて、歌集ごとの生起頻度を調べた結果、次のような点が明らかになった。

1. 「*ばかり*らむ*」は、『古今集』と『新古今集』にはない。
2. 「*は*なりけり*」は、いずれの歌集にも存するが、特に『山家集』に多い。

3. 「*まし*なりせば*」は、『山家集』に多い。
4. 「*こそ*りけれ*」は、『拾遺愚草』にはない。
5. 「*や*るらむ*」は、『古今集』にはない。

このように、それぞれの歌集から抽出されたパターンを相互に比較した結果、その時代や、歌人独自の特徴が表れた。これまで、研究者の勘によって漠然と予測されていた表現の特色の一面を、パターンとその頻度という具体的な形で把握することができたのである。

また、一首の和歌を単なる文字列と見なすという発想から、我々はさらに、次のような類似歌発見の方法を案出した[7]。すなわち、共通する部分列を多く含むという観点から和歌の類似性を捉え、和歌間の類似性指標を独自に定め、任意の二つの歌集間において類似度の高い歌の対を自動抽出するという手法である。この方法によって見出された歌の対は、以下の例に示すように、古歌を踏まえた歌作りの実際を垣間みせる。

人のおやの/心はやみに/あらねども/子を思ふ道に/まどひぬるかな
『後撰集』1102番

この歌は、三十六歌仙のひとり、藤原兼輔(877-933)の代表作のひとつで、子を思う親心を詠んだ名歌として、人口に膾炙している。ところが、これが、次に示す先行歌を踏まえて作られた替え歌であるという点は、これまで顧みられなかったようである⁹。

人を思ふ/心はかりに/あらねども/くもゐにのみも/なきわたるかな
『古今集』585番

⁹木船重昭氏『後撰和歌集全釈』(笠間書院, 1988年11月)、片桐洋一氏校注・新日本古典文学大系6『後撰和歌集』(岩波書店, 1990年4月)、工藤重矩氏校注・和泉古典叢書3『後撰和歌集』(和泉書院, 1992年9月)には、ともに指摘はない。なお、この歌は『大和物語』にも収められているが、管見によれば今のところ、諸注釈書にこの点について指摘したものは見当たらない。

これら二首の和歌は、次のように共通した骨組みをもっている。

ひと…/こころは…に/あらねども/…/…かな/

この場合、双方一致して用いられた句は、第三句「あらねども」という、ありふれた表現のものしかない。従って、たとえば『新編国歌大観』の各句索引による検索では、これら二首の「発想授受の系譜が浮かび上が」¹⁰りにくい。仮に『新編国歌大観』CD-ROM版の句検索や部分文字列検索を用いても、先に指摘した、共通する一首の骨組みを拾い上げようという視点は、通常ではなかなか得られないだろう。これらの点が、この二首の和歌の類似性を、これまで看過してしまった要因であると思われる。このように、文字列が一致する、あるいは類似する歌は、和歌文学研究において、興味深い視点を提供してくれる。

以上述べてきたように、共通する文字列に着目し、同一のパターンをもつ歌や類似歌を、複数の歌の中から自動抽出することで、これまで見過ごされてきた新たな問題点を発見し得るのである。

3 多様な類似性への対応

前章で述べたように、著者らは、和歌間の類似性指標を定義し、その指標の値が大きい和歌の対を人手によってチェックする、という方式によって類似歌の半自動抽出を目指している。文献[7]では、共通する文字列に着目した類似性指標を提案し、その指標が、これまで看過されていた本歌取りを高い類似度をもつものとして指摘できるなどの点で、非常に有効であることを示すことができた。しかし、和歌の類似性は多様であるから、一口に「共通する文字列に着目した類似性」といっても、有

¹⁰近藤潤一「(引用論の視点) 藤原定家を例として」『国文学』第39巻13号、1994年11月号)。

効な指標が一意的に定まるとは考えにくい。むしろ、研究者の視点やその時々興味に応じて研究者自身が指標を変更し、新たに類似度が高くなった対を調べる、というシナリオで研究を進めていくことが有効だと思われる。このような指標の変更は、場当たりのに行うのではなく、ある共通の土台の上で、見通しよく行うべきである。

この章では、まず、著者らの提案した文字列間の類似性指標の統一的枠組み [4] を示す。次に、この枠組みに沿って、指標の改善を行う。

3.1 統一的枠組み

様々な応用場面において、扱う問題に適した類似性指標を設計しようとする場合には、類似性自体を直感的に把握できることが重要である。よく用いられる編集操作の回数に基づく編集距離の定義は、この要件を満たすものとはいえない。これに対し、著者らの提案する枠組みは、類似性そのものを共通パターンの形で捉え、その共通パターンにスコアを付与する、という形で指標の定義を行うため、指標を直感的に把握しやすく、問題に適した指標を見通しよく設計できる。例えば、MIDI データなど、機械可読形式で表現された音楽情報において、主旋律間の類似性を扱う場合にも有効である [10, 11]。また、従来の編集距離や重み付き編集距離なども、この枠組みで表現することができる。

この節で提案する枠組みでは、二つの文字列間の共通性を、共通パターンとして捉え、類似度を、共通パターンの最大スコアと定義する。すると、類似性指標の違いは、

- 共通パターンの属するパターン集合 Π 。
- Π の各パターンにスコアを与えるパターンスコア関数 Φ 。

の二つということになる。例えば、パターン集合として正規パターン [3] 全体の集合を用い、パターン中の文字の個数をそのパターンのスコアとすると、最長共通部分列の長さに基づく類似性指標が得られる。実際、文字列 ACDEBA と ABDAC は、共通パターン $A*D*A*$ を含むが、これは三つの文字を含んでいる。

Σ をアルファベットとする。パターンとは Σ 上の言語の‘表現’ (description) であり、パターン π の表す言語を $L(\pi)$ で表す。パターン π が文字列 $w \in \Sigma^*$ に合致するとは、 $w \in L(\pi)$ であるときをいう。パターン π が二つの文字列 $x, y \in \Sigma^*$ の共通パターンであるとは、 π が両方に合致するとき、すなわち、 $x, y \in L(\pi)$ であるときをいう。以上で、文字列間の類似性指標 (非類似性指標) を定義するための準備が整った。

定義 1 Σ 上の文字列間の類似性指標とは、対 $\langle \Pi, \Phi \rangle$ をいう。ここで、 Π はパターン集合とよばれ、各要素 $\pi \in \Pi$ について Σ 上の言語 $L(\pi)$ が対応する。また、 Φ は Π から実数全体の集合 R への関数で、パターンスコア関数とよばれる。

定義 2 類似性指標 $\langle \Pi, \Phi \rangle$ のもとでの文字列 $x, y \in \Sigma^*$ の類似度 $SIM_{\langle \Pi, \Phi \rangle}(x, y)$ を、次式で定義する。

$$SIM_{\langle \Pi, \Phi \rangle}(x, y) = \max \{ \Phi(\pi) \mid \pi \in \Pi \text{ かつ } x, y \in L(\pi) \}.$$

非類似度の場合には、上式において、最大値でなく最小値をとればよい。

上では、パターンを、アルファベット上のある言語を定義する表現としたが、パターンを文字とワイルドカードから成る列に制限しても、実に様々な類似性指標を扱うことができる。

ここでは、ワイルドカードとして、表 1 に示した 4 種類を導入する。

表 1: ワイルドカード

$*$: Σ 上の任意の文字列と合致するワイルドカード;
ϕ	: Σ の任意の文字と合致するワイルドカード;
$\phi^{(n)}$: Σ 上の長さ n の任意の文字列と合致するワイルドカード ($n \geq 1$);
$\phi(u_1 \dots u_k)$: Σ 上の文字列 u_1, \dots, u_k のいずれとも合致するワイルドカード.

さらに、括弧 $[,]$ を導入し、ワイルドカード γ に対して新たなワイルドカード $[\gamma]$ を $L([\gamma]) = L(\gamma) \cup \{\epsilon\}$ によって定義する。ここに、 $L([\gamma])$, $L(\gamma)$ は、ワイルドカード $[\gamma]$, γ の表す言語とする。例えば、文字 $a \in \Sigma$ に対して、ワイルドカード $[a]$ は空文字列 ϵ と文字 a のいずれとも合致する。同様に、ワイルドカード $[\phi^{(n)}]$ は、空文字列 ϵ および長さ n の任意の文字列と合致する。

以下では、主な指標が、上記の枠組みで記述できることを示す。

【文字の挿入・削除・置換に基づく編集距離】

パターン集合: $\Pi_1 = (\Sigma \cup \{\phi, [\phi]\})^*$.

パターンスコア関数: $\Phi_1(a) = 0$ ($a \in \Sigma$) と $\Phi_1(\phi) = \Phi([\phi]) = 1$ によって定まる準同型写像 $\Phi_1: \Pi_1 \rightarrow \mathbf{R}$.

【LCS の長さに基づく類似性指標】

パターン集合: $\Pi_2 = (\Sigma \cup \{*\})^*$.

パターンスコア関数: $\Phi_2(a) = 1$ ($a \in \Sigma$) と $\Phi_2(*) = 0$ で定まる準同型写像 $\Phi_2: \Pi_2 \rightarrow \mathbf{R}$.

【Hamming 距離】

パターン集合: $\Pi_3 = (\Sigma \cup \{\phi\})^*$.

パターンスコア関数: $\Phi_3(a) = 0$ ($a \in \Sigma$) と $\Phi_3(\phi) = 1$ で定まる準同型写像 $\Phi_3: \Pi_3 \rightarrow R$.

【重み付き編集距離】

パターン集合: $\Pi_4 = (\Sigma \cup \Delta_4)^*$.

ここで, $\Delta_4 = \{[a] \mid a \in \Sigma\} \cup \{\phi(a|b) \mid a, b \in \Sigma \text{かつ } a \neq b\}$.

パターンスコア関数:

$\Phi_4([a]) = \delta(a, \varepsilon)$, $\Phi_4(\phi(a|b)) = \delta(a, b)$, $\Phi_4(a) = 0$ ($a, b \in \Sigma$) によって定まる準同型写像 $\Phi_4: \Pi_4 \rightarrow R$.

【ギャップペナルティ・重み付き編集距離】

パターン集合: $\Pi_5 = (\Sigma \cup \Delta_5)^*$.

ここで, $\Delta_5 = \Delta_4 \cup \{[\phi^{(n)}] \mid n \geq 1\}$.

パターンスコア関数: $\Phi_5([\phi^{(n)}])$ を長さ n のギャップに対するペナルティとし, それ以外は Φ_4 と同様にした準同型写像 $\Phi_5: \Pi_5 \rightarrow R$.

【交換 (transposition) を許す編集距離】

パターン集合: $\Pi_6 = (\Sigma \cup \Delta_6)^*$.

ここで, $\Delta_6 = \{\phi(ab|ba) \mid a, b \in \Sigma\}$.

パターンスコア関数: $\Phi_6(a) = 0$ ($a \in \Sigma$), $\Phi_6(\phi) = \Phi_6(\phi) = 1$, および $\Phi_6(\phi(ab|ba)) = 1$ ($a, b \in \Sigma$, $a \neq b$) によって定まる準同型写像 $\Phi_6: \Pi_6 \rightarrow R$.

以上の例では、写像 Φ_i はいずれの場合も Π_i から R への準同型写像であったが、一般に、パターンスコア関数 Φ が準同型写像である必要はない。

3.2 指標の変更点 1 – 句ごとに対応をとることの問題 –

文献 [7] で与えた類似性指標は、以下のようなものであった。

- 和歌を、5-7-5-7-7 の句に分割し、句ごとに求めた類似度の和を全体の類似度とする。
- 句と句の対応付けとしては、 $5! = 120$ とおりのすべてを考慮して、その中で最も類似度の総和が大きくなるものをえらぶ。
- 句と句の類似度は、共通の正規パターンにおいて文字の連続性を考慮して与える。

句間の類似性指標は、前節の枠組みに沿って以下のように記述できる。

【文献 [7] の指標】

パターン集合: $\Pi = (\Sigma \cup \{*\})^*$.

パターンスコア関数: 次で定まる写像 $\Phi: \Pi \rightarrow R$

$$\Phi(u_1 * \dots * u_k) = \sum_{i=1}^k f(|u_i|) \quad (u_1, \dots, u_k \in \Sigma^*, k \geq 1).$$

ここで、関数 f は、

$$f(n) = \begin{cases} 0, & n = 0 \text{ のとき} \\ n - s, & n > 0 \text{ のとき} \end{cases}$$

とし、パラメータ s は $0 < s < 1$ を満たす任意の実数とする。文献 [7] では、 $s = 0.9$ を用いた。

しかし、この指標では、次のような場合をうまく扱うことができない。

例 1 (本歌取り)

ふるさとは/よしのの山し/ちかければ/ひと日もみ雪/ふらぬ日はなし

『古今集』321 番

みよしのは/山もかすみて/白雪の/ふりにしさとに/春はきにけり

『新古今集』1 番

この本歌取りの例では、先行歌の第二句に現れていた「よしの」「やま」の語句が、新古今歌では初句と第二句に分かれて現れていることがわかる。文献 [7] の類似性指標は、句と句の対応のみを扱うために、このような場合をうまく扱うことができない。

そこで、句に分割せずに、31 文字全体を比較して、共通して現れる部分文字列に着目する。この際、共通部分文字列の生起順序は問わない。

定義 3 非空文字列の多重集合 $\{u_1, \dots, u_k\}$ ($u_1, \dots, u_k \in \Sigma^+$, $k > 0$) を **順序自由パターン** (*order-free pattern*) と呼び、 $\pi(u_1, \dots, u_k)$ のように表す。順序自由パターン $\pi(u_1, \dots, u_k)$ の表す言語を、

$$L(\pi(u_1, \dots, u_k)) = \bigcup_{\sigma \in \mathcal{S}_k} L(*u_{\sigma(1)} * \dots * u_{\sigma(k)} *)$$

と定める。ここで、 \mathcal{S}_k は集合 $\{1, \dots, k\}$ 上の置換全体の集合を表す。

次のような類似性指標を考えよう。パターン集合 Π を、順序自由パターン全体の集合とし、各順序自由パターン $\pi(u_1, \dots, u_k)$ に対するスコアを、ある関数 f を用いて、 $\sum_{i=1}^k f(|u_i|)$ と定める。

共通部分文字列である各 u_i について連続性を考慮せず、 $f(n) = n$ ($n \geq 1$) とするならば、すべて1文字単位で考えてよいから、各文字について二つの文字列中での生起頻度のうち小さい方の値を求め、それらを合計すれば、求める類似度が得られる。すなわち、文字 c の文字列 x における生起回数を $n_c(x)$ で表すとき、文字列 x, y の類似度は、 $\sum_c \min\{n_c(x), n_c(y)\}$ で与えられる。

しかし、一般の f の場合には、文字 c ごとに

$$\frac{\max\{n_c(x), n_c(y)\}!}{|n_c(x) - n_c(y)|!}$$

通りの可能性があり、これを各文字ごとに掛け合わせたすべての場合を検討する必要がある。従って、最悪時の計算時間は、入力長 n に対し $O(n!)$ となる。しかしながら、入力長 n は31文字程度で増加しないため、実際の計算時間が耐えられるものであるなら、問題はない。

ここでは、関数 f として、

$$f(n) = \begin{cases} 0, & n = 1 \text{ のとき} \\ n, & n > 1 \end{cases}$$

を用いた。すなわち、1文字だけの文字の一致は、偶然の一致の可能性が高いと考え、2文字以上連続したものだけを考慮した。以上をまとめると、次のようになる。

【順序自由パターンに基づく指標】

パターン集合: $\Pi = \{\Sigma \text{ 上の順序自由パターン}\}$ 。

パターンスコア関数: 次で定まる写像 $\Phi: \Pi \rightarrow R$

$$\Phi(\pi(u_1, \dots, u_k)) = \sum_{i=1}^k f(|u_i|). \quad (u_1, \dots, u_k \in \Sigma^+)$$

ここで、 $f(1) = 0, f(n) = n$ ($n > 1$) とする。

この新しい指標を用いて、『古今集』と『新古今集』の間のすべての対の類似度を算出した。最も類似度の高い対は、以下の2対であった。

例 2 (本歌取り)

さむしろに/衣かたしき/こよひもや/我をまつらむ/うちのはしひめ

『古今集』689番

はしひめの/かたしき衣/さむしろに/待つよむなしき/宇治の曙

『新古今集』636番

例 3 (本歌取り)

花のちる/ことやわびしき/春霞/たつたの山の/うぐひすのこゑ

『古今集』108番

霞たつ/春の山辺に/さくら花/あかずちるとや/鶯のなく

『新古今集』109番

古今集689番歌の結句の「うち」と「はしひめ」が、新古今集636番歌では、結句と初句とに分かれているが、これらに対応して類似度が計算されていることがわかる。もう一方の対についても同様である。なお、文献[7]の指標では、これらの対の類似度は、それぞれ、11.5、10.5であり、その順位は、55位、121位であった。

3.3 指標の変更点2 - パターンの生起頻度に基づく指標 -

次の対に注目されたい。

例 4 (本歌取りでない対)

春霞/たなびく山の/さくら花/見れどもあかぬ/君にもあるかな

『古今集』684番

紫の/雲にもあらで/春霞/たなびく山の/かひはなにぞも

『新古今集』1448番

この対は、『古今集』『新古今集』間で類似度を算出した際、類似度による順位が、文献[7]の指標では12位、3.2節で示した順序自由パターンに基づく指標では16位であった。この2首は、共通表現「春霞たなびく山の」が共通するために、類似度が高くなったものである。しかし、このような類想は、和歌にはありふれたものである。そこで、共通表現の頻度を考慮することにより、このような対の類似度を下げること考えよう。

本稿では、類似性指標を、パターン集合とパターンスコア関数の対として捉える。文献[7]の指標と3.2節で示した指標は、いずれも、パターンのスコアを統語的に与えるものであった。これに対し、パターンのスコアを、パターンの生起頻度に依存した方法で与えるのである。

S を Σ^+ の有限部分集合とし、 S に属する文字列の類似度のみを考えることにする。パターン π の S に関する稀少度(rarity)を以下のように定義する。

定義 4 パターン π の S における生起確率を $Pr(\pi; S)$ とする。このとき、

$$\log_2(1/Pr(\pi; S))$$

を、パターン π の S に関する**稀少度(rarity)**とよぶ。

パターンの稀少度を、そのままパターンのスコアとする類似度指標を考えよう。すなわち、類似度の高い文字列対とは、稀少度の高い共通パターンをもつ対である、ということになる。稀少度の定義はパターンの形式に依存しないため、類似性指標のパターン集合として任意のものをを用いることができる。

稀少度の考え方に基づいて、和歌の類似性を扱うための新しい指標を、以下のように定める。

【順序自由パターンに基づく指標】

パターン集合: $\Pi = \{\Sigma \text{ 上の順序自由パターン}\}$.

パターンスコア関数: 次で定まる写像 $\Phi: \Pi \rightarrow \mathbf{R}$

$$\Phi(\pi) = \log(1/Pr(\pi; S)) \quad (\pi \in \Pi).$$

ここでは単純に、以下のようにした。パターン $\pi(u_1, \dots, u_n)$ の生起確率について、次のように仮定する。

$$Pr(\pi(u_1, \dots, u_n); S) = \prod_{i=1}^n Pr(u_i; S).$$

ここで、 $Pr(u; S)$ は文字列 u の S における生起確率を表す。生起確率 $Pr(u; S)$ は、

$$Pr(u; S) = \frac{|S \cap L(*u*)|}{|S|}$$

として求める。このとき、上の仮定より、

$$\Phi(\pi(u_1, \dots, u_n)) = - \sum_{i=1}^n \log(Pr(u_i; S))$$

を得る。

ただし、長さ 1 の文字列 u に対しては特別に $\log_2(Pr(u; S)) = 0$ とした。

このように定めた指標を用いて、『古今集』と『新古今集』の間の比較を行った。集合 S としては、二十一代集を用いた。その結果、はじめに

あげた古今集 684 番歌と新古今集 1448 番歌の類似度は相対的に下がり、全体の 93 位になった。

文献 [7] で示した指標を A, 3.2 節で示した指標を B, 上で示した指標を C とする。これら三つの指標について、類似度の度数分布を表 2 に示す。表において、括弧内の数は、注釈書において、本歌・類想歌・参考歌など、表現上、影響関係のある歌の指摘がみられた対の数を示す。たとえば、指標 A については、類似度の高い 73 対のうち 50 対が注釈書に指摘されていた。この割合に関していえば、指標 A がほかの指標 B, C にと比べてやや勝っているように見える。しかし、指摘のない対の中にも、しかるべき歌が見落とされている場合があるはずである。和歌文学研究者の興味を引くのは、まさにその従来指摘されていない歌であり、従って、この割合だけをもとに指標の優越性を云々すべきではない。

ところで、指標 C は、頻度を考慮した結果、指標 A, B では下位であった対が浮上してきた。例を三つあげてみる。

例 5 (類型表現)

きみが世は/限もあらじ/ながはまの/まさごのかずは/よみつくすとも

『古今集』1085 番

君が代の/としのかずをば/白妙の/浜のまさごと/たれかしきけむ

『新古今集』710 番

指標 A, B, C のもとでの上の対の順位は、それぞれ、916 位, 213 位, 36 位であった。指標 C において生起確率を考慮したことにより、順位が大きく上昇していることがわかる。最大スコアを与えた共通順序自由パターンは、

$$\pi(\text{きみがよは, はまの, まさご, かず})$$

であった。上の 2 首は、いずれも、限りない「きみがよ」の数を浜辺の

表 2: 類似度の度数分布

括弧内の数は、注釈書 [9, 6] に本歌取りとの指摘があった対の数を示す。

(A) 文献 [7] の指標

類似度	度数	累積度数
16-17	2(1)	2(1)
15-16	1(1)	3(2)
14-15	4(4)	7(6)
13-14	8(6)	15(12)
12-13	26(18)	41(30)
11-12	32(20)	73(50)
10-11	77()	150()
9-10	137()	287()
8- 9	332()	619()
7- 8	1066()	1685()
6- 7	3160()	4845()
5- 6	10089()	14934()
4- 5	35407()	50341()
3- 4	134145()	184486()
2- 3	433573()	618059()
1- 2	873904()	1491963()
0- 1	717547()	2209510()

(B) 順序自由パターンに基づく指標

類似度	度数	累積度数
21	2(2)	2(2)
20	2(1)	4(3)
19	4(4)	8(7)
18	7(5)	15(12)
17	11(9)	26(21)
16	22(11)	48(32)
15	54(20)	102(52)
14	110()	212()
13	247()	459()
12	608()	1067()
11	1506()	2573()
10	3534()	6107()
9	7847()	13954()
8	20744()	34698()
7	30312()	65010()
6	104053()	169063()
5	70713()	239776()
4	370354()	610130()
3	75323()	685453()
2	792725()	1478178()
1	0()	1478178()
0	731332()	2209510()

(C) 頻度を考慮した指標

類似度	度数	累積度数
46-48	1(1)	1(1)
44-46	1(1)	2(2)
42-44	2(2)	4(4)
40-42	4(2)	8(6)
38-40	4(3)	12(9)
36-38	8(5)	20(14)
34-36	17(11)	37(25)
32-34	31(18)	68(43)
30-32	55(18)	123(61)
28-30	117()	240()
26-28	256()	496()
24-26	547()	1043()
22-24	1285()	2328()
20-22	2850()	5178()
18-20	6285()	11463()
16-18	13624()	25087()
14-16	27532()	52619()
12-14	54444()	107063()
10-12	97295()	204358()
8-10	171823()	376181()
6- 8	253714()	629895()
4- 6	368142()	998037()
2- 4	480141()	1478178()
0- 2	731332()	2209510()

砂粒の数に託したもので、賀歌の表現類型のひとつとすることができる。これは、各句索引を用いたのでは検索できない対である。

例 6 (異伝)

萩が花/ちるらむをのの/つゆじもに/ぬれてをゆかむ/さ夜はふくとも

『古今集』224 番

あき萩の/さき散る野辺の/夕つゆに/ぬれつつきませ/よはふけぬとも

『新古今集』333 番

この対の指標 A,B,C のもとでの順位は、それぞれ、620 位、213 位、38 位であった。最大スコアを与えた共通順序自由パターンは、

$$\pi(\text{はぎ, ちる, つゆ, ぬれ, よはふ, とも})$$

であった。新古今の歌は、万葉歌を再録したものである。また、古今歌は読人しらず歌で、詠歌年代は古今集時代よりも古いと思われる。従って、どちらも古歌であって詠歌年代の前後関係は判断しにくい。単なる類想歌という以上の共通性があり、異伝(一方の歌から他方の歌が派生した)の可能性もある。ほとんどの古今集の注釈書は、この万葉歌を指摘している。ぜひ、順位を上げたい対である。

例 7 (同一技巧)

けさはしも/おきけむ方も/しらざりつ/おもひいづるぞ/きえてかなしき

『古今集』643 番

あさ露の/おきつる空も/おもほえず/きえかへりつる/こころまどひに

『新古今集』1172 番

この対の指標 A,B,C のもとでの順位は、それぞれ、52997 位、1068 位、67 位であった。指標 A と比べると、順位が劇的に上昇しているのがわか

る。共通パターンは、

π (おき,りつ,おも,きえ,つる)

であった。古今歌は「しも(霜)」、新古今歌は「露」であるが、どちらも「置く」ものである。これが「起く」との掛詞になっており、「しも」「露」の縁語「消ゆ」(死ぬ)が用いられるという表現技巧が共通している。両歌は、いずれも後朝(きぬぎぬ)の歌であり、この特定の場面における共通の表現技巧を見いだしたと言える。

このように、和歌の類似性を、順序自由パターンの形式で捉え、さらに頻度を考慮することで、既知の常套表現をできる限り排除し、1対1の、より緊密な類似性をもつ歌の対を得ることができた。

4 むすび

従来、古典和歌の表現に関する研究は、ある一つの表現に着目し、それと同じ用例を博搜した上で、その結果を検討するという方法をとってきた。そのために、『新編国歌大観』の各句索引で検索しようと、『新編国歌大観』CD-ROM版で検索しようと、根本的な手法の差はないと言っていい。だが、その方法では、『新編国歌大観』に収載された45万首の歌を対象に、表現上の特色を経験と勘とで見つけ出し、古典和歌の表現における継承と変容の歴史を把握するのに、これから先、どれだけの時間と労力がかかるであろうか。

そこで本稿では、これまでの検索とは全く異なる新たな方法を提案した。すなわち、一首の和歌を単なる文字列として捉えて計算機にかけ、二つの歌集間で、共通する文字列を多く含む和歌の対を自動抽出するという手法である。これにより、表現上の類似歌を発見することができる。こ

れまでの研究方法は、この、和歌研究の端緒となる段階にたどり着くまで、手作業で個々の用例にあたるしかなかったが、それを、計算機に肩代わりさせ、網羅的に提示させようというのである。そして、古典和歌における多様な類似性を鑑み、異なる類似性指標を設定してみた。ここでは、一首の歌を五句に分割した上で、句ごとに共通文字列をとる方法と、句を分割せずに、共通文字列をとる方法を試み、さらに後者については、その表現の生起頻度を考慮した。その結果、従来の方法では見つけ出しにくい類似歌の対が、少なからず指摘されたことで、これらの類似性指標の有効性を示すことができたと考える。

しかし、本稿で示した指標では、次のような類似性をうまく扱うことができない。たとえば、「たてるやいづこ」「たてるはみやこ」という句を口ずさんでみると、たいへんよく似ている感じがする。それは、同じ7拍の句の中に、共通文字列「たてる」と「こ」が、句中の同じ場所、すなわち、句頭から3拍目までと、句末の1拍に位置しているからであろう。そしてさらに言えば、共通パターン「たてる*こ」のワイルドカード*に合致する「やいづ」と「はみや」についても、「や」と「は」、および「い」と「み」は、それぞれ母音が共通している。ところが、句間の類似性指標として、文献[7]で示した指標を用いたのでは、このような対の類似度は低くなってしまふ。こういった類似を捉えるためには、単に文字の一致・不一致を見るのではなく、母音または子音の一致までも考慮した、新しい類似性指標を定義する必要がある。

そのような指標は、長さの同じ句だけを扱うのであれば、対応する文字が一意的に定まるため、比較的容易に定義することができる。しかし、実際には、5拍の句と7拍の句が類似している場合が少なからず見られる。たとえば、「ひとしれぬ」と「ひとにしられぬ」は、文献[7]の指標では、共通パターン「ひと*し*れぬ」において共通文字列が三つに分離し

ているため、高い類似度は与えられない。だが、これら二つの句は、意味上から見ても、類似性の高いものとして扱うべきであろう。この類の例としては、他にも、「いはにさく」「いはほにもさく」、「まきのとを」「まきのいたとも」、「なかりせば」「なきよなりせば」などがある。このような対を類似したものとして扱うためには、同じ仮名が、句中で何番目に配置されているか、といった規則性を見だし、それに基づいて類似度を定義する必要が認められる。

以上、計算機を用いて類似歌を抽出する手法を述べてきたが、計算機が示した結果の、どの和歌の対に着目し、和歌史的にどう意味づけていくかは、和歌研究者に委ねられること、言うまでもない。計算機は、研究の糸口を示してくれるに過ぎないのである。だが、古典和歌45万首には、その数の多さに加え、成立年代未詳の歌集や、ほとんど研究の手が及んでいない歌集が含まれている。それらを研究対象として、でき得る限り多くの角度から表現を分析し、新たな知見を得て、それらを和歌史的に位置づけるためには、本稿のような計算機を用いた手法の導入が、もはや必要不可欠であろう。『新編国歌大観』CD-ROM版の古典和歌テキストデータは、それを可能にしてくれた。この新手法による古典和歌の表現分析は、いま、まさに機が熟したと言えるであろう。

参考文献

- [1] S. Arikawa et al. SIGMA: a text database management system. In *Proc. Information Modelling and Knowledge Bases (IMKB'90)*, pp. 455–468, Amsterdam, Netherlands, 1990. IOS.
- [2] J. Rissanen. Modeling by the shortest data description. *Automatica*, Vol. 14, pp. 465–471, 1978.
- [3] T. Shinohara. Polynomial-time inference of pattern languages and its applications. In *Proc. 7th IBM Sympo. Math. Found. Comp. Sci.*, pp. 191–209, 1982.
- [4] K. Tamari, M. Yamasaki, T. Kida, M. Takeda, T. Fukuda, and I. Nanri. Discovering poetic allusion in anthologies of classical Japanese poems. In *Proc. 2nd International Conference on Discovery Science (DS'99)*, pp. 128–138, 1999.
- [5] M. Yamasaki, M. Takeda, T. Fukuda, and I. Nanri. Discovering characteristic patterns from collections of classical Japanese poems. *New Generation Computing*, Vol. 18, No. 1, pp. 61–73, 2000. Preliminary version in: *Proc. DS'98 (LNAI 1532)*.
- [6] 久保田淳. 新古今和歌集. 新潮日本古典集成. 新潮社, 1979.
- [7] 山崎真由美, 竹田正幸, 福田智子, 南里一郎. 和歌データベースからの類似歌の自動抽出. 情報処理学会「人文科学とコンピュータ」研究報告, Vol. 98, No. 97, pp. 57–64, 1998.

- [8] 竹田正幸, 福田智子, 南里一郎, 山崎真由美. 和歌データベースにおける特徴パターンの発見. 情報処理学会論文誌, Vol. 40, No. 3, pp. 783-795, 1999.
- [9] 田中裕, 赤瀬信吾. 新古今和歌集. 新日本古典文学大系. 岩波書店, 1992.
- [10] 門田隆史, 石野明, 竹田正幸, 松尾文碩. 音符列比較における類似性指標の評価. 第59回情報処理学会全国大会講演論文集(2), pp. 17-18, 1999.
- [11] 門田隆史, 石野明, 竹田正幸, 松尾文碩. 主旋律の類似性について. 情報処理学会「人文科学とコンピュータ」研究報告, 2000. to appear.

日本古典文学本文データベース(実験版)の試験公開

安永尚志

(A03「情報処理」班・国文学研究資料館)

1. まえがき

1999年3月、特定領域研究(当初、重点領域研究と称した)「人文科学とコンピュータ」が完了し、その各種情報資源および研究成果の継承と継続的進展を目的の1つとして、当特定領域研究「古典学の再構築」に、「古典学のための情報処理」計画研究班が組織された。当計画研究班が抱える研究課題は多く、また研究成果も着実にあがっている。ここでは、今年度は特記的事項として、日本古典文学作品のフルテキストデータベースの試験公開を開始したので、その研究経緯の概要を述べる。

1999年4月15日から2ヶ年の予定で、懸案の日本古典文学本文データベース(実験版)の試験公開を開始している。日本古典文学本文データベース(実験版)は、岩波書店刊行の旧版「日本古典文学大系」全百巻の全作品の本文(テキスト)をデータベース化したものである。本文データベースは国文学研究資料館大型コンピュータで実験的に管理されている。本文データベース検索システム(実験版)は、この本文データベースをインターネットに接続されたパソコンなどから、利用するための試験的なシステムである。国文学研究資料館のホームページからアクセス可能としている。全100巻中の約600作品から作品を選び、語彙を検索したり、全文を表示したり、ダウンロードすることなどができる。

以下、試験公開の目的を述べ、現在までの利用状況を簡単にまとめる。

2. 試験公開の目的

試験公開としている目的は幾つかある。第一は、より良いデータを作

ることである。このデータベースの計画は1987年（昭和62年）にスタートしているから、試験公開に至るのに10年余を要している。ただし、実際にはデータ入力が終わった段階で中断の止む無きに至り、リスタートしたという経緯がある。リスタート時点での本文データベースは、データファイルであってデータベースではなく、またデータ校正も完了していなかった。したがって、本文データベース化を進め、同時に最低限のデータ校正を行う必要があった。とくに、従来の研究の範囲ではデータ校正に最善を期すというパワーを持ち得ず、試験公開による利用者のフィードバックに期することとせざるを得ない。

第二は、出版社との知的財産権などに関わる問題である。印刷刊行された古典テキストの全文をデータベース化するには、出版社との契約が必要である。この他にも、翻刻、校訂者の著作権あるいはデータベースの著作権など多くの解決すべき課題がある。

試験公開では、本文データベースはプレーンテキストとKOKIN ルールによる符号化テキストの提供を行っている。システム機能も主としてダウンロードによる利用者自身の環境への資源提供を柱とする。語彙検索、語彙統計程度の必要最低限のシステム機能の提供しか行っていない。

ここでの本文データベース研究は、テキストデータ記述の研究、並びにそのデータベース化の研究である。KOKIN ルールは古典文学作品テキストのデータ記述のための記述文法である。すなわち、マークアップ文法である。これはテキストの本文構造、レイアウトなどのメディアに関わる表現構造を記述でき、また様々な表記（傍記と言う）を記述可能である。さらに、品詞や古文独特の掛詞などの表現や意味構造をも表現可能である。

なお、これらの諸機能がSGMLで表現可能かどうかの研究が従来の研究の目的の1つであった。これについてはそれらの報告書に譲り、ここでは割愛する。

電子化テキストはプレーンテキストでもよいかも知れないが、やはり

符号化テキストが望まれる。また、データ記述されたままでのデータ流通が考えられるが、出来ればデータベース化したい。しかしながら、未だ一般に有効なフルテキストのためのDBMSはない。KOKIN ルールで記述されたデータから、関係モデルを利用したデータベースが開発されている。国文学研究資料館のホームページ経由での試験公開はこの方式である。論理レコードと言う概念を定義し、これは原本の本文の1行分に相当するが、これに属性として論理レコードの継続IDを持たせて対処している。

なお、SGMLで書かれたデータのDBMSも未だないが、例えばOpen-Textなどのフルテキスト検索システムが強力な手段となることが分かり、現在この方式の実装が進んでいる。SGMLは構造を記述しているので、単なる全文検索ではないより深い構造検索が可能である。また、SGMLからHTML、XMLへの変換は比較的簡単で、それにより直ちにインターネットで提供可能となる。これについても、ここでは割愛する。

3. 利用の状況

以下の考察において、利用統計は全て1999年4月15日から12月末までの9ヶ月間のものである。ただし、データベースは大型コンピュータにあり、運用時間の制限があるため、実際にこの間に利用できた日数は164日である。表1に、本文データベースの利用統計の1例を示す。全期間を通じての利用回数は16,000件を超える。1日当たり平均約100件の利用がある。本文データベースの利用には利用登録が必要である。この期間に824名の登録があった。余り意味がないが、1人当たりの平均の利用回数は約20回である。なお、個人の最大利用回数は661回である。

表1 本文データベースの利用状況

	利用者数 (登録者)	利用回数	利用時間 (分)	ダウンロード 作品数
国内	771	15,508	20,633	11,955
海外	53	805	993	741
合計	824	16,313	21,626	12,696

また、登録したものの利用のない人も多く、408名を数える。すなわち、実利用者は416名で、約50%である。

一方、全体のうち、約6%の海外の利用者（53名）がいる。欧米が主であるが、全世界（30ヶ国余）に渡っている。利用も全体の5～6%に渡っている。以下でも触れるが、この本文データベースはほとんど宣伝をしていないが、海外での関心が高いことを示していると言えよう。日本文学の古典テキストを電子化テキストで入手し、様々な研究、教育活動などに活用するというのを聞いている。

なお、ホームページへのアクセス回数は約13,000回である。利用回数との差異はホームページアクセス回数の統計採取開始は約1ヶ月遅れであること、同じアクセス中に複数の利用があることなどによる。

この試験公開版のシステムは高度な機能処理を提供していない。所望の作品テキストのダウンロードを行って、後は利用者の利用環境で自在に使ってもらうことを主としている。

試験公開はほとんど宣伝はしていない。ホームページにニュースがある程度である。したがって、利用の申し込みもホームページを見てということになる。海外からの問合せ、アクセスもかなり多い。我々とのコラボレーションとしての共同研究者の利用もあるが、全般的に見ても海外における日本古典文学作品への関心の高さをうかがうことができる。

表2に、よく利用される文学作品の上位10位をあげる。この傾向が何を物語るかについては興味のあるテーマであるが、ここでは詳細な検討は割愛する。ただし、一言付加する

表2 よく利用される作品ベスト10

順位	作品	参照回数
1	今昔物語集	429
2	日本書紀	383
3	源氏物語	254
4	宇津保物語	204
5	栄華物語	198
6	太平記	193
7	平家物語	156
8	万葉集（訓読文）	154
9	古事記	153
10	萬葉集（白文）	148

ならば、表2からは利用層の広がりや教育面での活用などをうかがうことができる。これらは大変メジャーな作品であるばかりでなく、量的にもかなり膨大な作品である。利用者は文学者だけではなく、広く人文科学全般に渡っていること、大学、大学院の教育ではほとんど必須の作品であることなどが、要因として考えられる。さらに、現在文学研究者の関心の高いものとして、説話文学の研究があるが、429件のダウンロードはその裏付けとも見えよう。

4. あとがき

現在までに、利用者から80余件の貴重な意見、問合せなどをいただいている。試験公開の目的は、使っていただきながら内容を正すということでもあり、大変貴重である。紙面を借りて、ここに深く御礼申し上げる。指摘していただいたテキストのエラーなどはその都度修正を行っている。検索システムに関する問合せ、意見も多く、今後のシステム開発に大いに参考としたい。とくに、大型コンピュータを使っていることから来る運転時間の制約に対する要望が多く（とくに、時差のある海外から）、国文学研究資料館において時期システムでの24時間を念頭にした計画が進められている。

現在、出版社との約束から、利用者の登録が必要である。利用目的も学術研究に限定している。多くの方々から、利用資格の緩和の要望がよせられている。現時点ではやむを得ないが、次期システムでは考慮したいと考えている。また、試験公開は2ヶ年の時限となっている（2001年1月末まで）。今後、本格運用に向けての、および運用継続のための詰めを進めなければならない。

なお、本稿は昨年度終了した特定領域研究「人文科学とコンピュータ」の今年度の最終報告書に報告した原稿に、手を加えたものであることをお断りしておく。

利用期間がまだ1ヶ年あり、利用に際しての利用登録が必要であるが、

是非お使いいただきたい。国文学研究資料館のホームページから、利用登録およびアクセスができる。日本古典文学本文データベース（実験版）ページの「利用について」をよくご覧いただき、登録されたい。

最後に、ホームページのアドレスをあげておく。

<http://www.nijl.ac.jp/>

（調整班研究会発表要旨）

朱熹テキストの解読より

木下鉄矢

(A04「古典の世界像」班・岡山大学)

0 - 発端

朱熹（朱子、1130-1200）の遺したテキスト、および彼の講義・談話を記録した『朱子語類』などのテキストはながいあいだ私にとってはここに謎を露呈しているテキストであった。朱子学の伝統や近年の朱子学研究の提示している「解読格子」は、私にとってはむしろそのテキストそのものを深い謎の中に迷い込ませる役割を果たしているものとか思いなせなかった。この状況を変えたのは、彼の「鏡」についての言述をそのものとして理解する或るきっかけを得たことであった。そのきっかけとは、朱熹は、我々が初等中等教育において刷り込まれた「光線光学」や「幾何光学」などと呼ばれる学科が提示する「鏡」なり「鏡像」なりについての理解方式を、全く知らなかったであろう、という事実気づいたことである。

では改めて、朱熹は「鏡」を如何に理解していたのか、と問うて見よう。さらにこの問いは朱熹のテキスト全般の読みに対してどのような展望を開くのか。次の二点を指摘しておきたい。

(1)「鏡に物の姿が映る」と我々が言述している事象を朱熹は如何に理解していたのか。このことを彼の言述に即して分析し描出してみることが、彼が、広く「物」的存在そのものを如何に経験していたか、という問題を、我々自身の経験方式から自覚的に切断して理解するための偵察作業となるだろう。

(2) また「鏡」は朱熹の生涯にわたる思索の重要なテーマであった。「心」や「易」が説明される際に、最も典型的なイメージとして使用されるのであるから、「鏡」についての朱熹の理解をそれとして割り出しておくことは、彼の「心」や「易」についての理解を我々が具体的なイメージに即して理解する際に、有力な基礎を提供するであろう。

1 - 「鏡」の理解

a. 「照」

鏡についてのテキストには、次のような形で「照」の字が通常に現れる。

如鏡本明……其明又能照物。(『朱子語類』卷14-82条)

漢文訓読体で訓み下せば、「鏡の本と明らかなるが如し……其の明るさ、又た能く物を照らす」となるが、「てらす」と訓むのは、通常の日本語としては誤解を招きかねない。つまりこれらの「鏡」に伴って現れる「照」は日本語としては「うつす」と訳するのが適当な意味で使われていると認定できるものである。このことはすでに指摘されている。

しかし、この「照」は同時に我々の「てらす」意味でも出現する。

将此火照物、則無不燭。(『朱子語類』卷14-85条)

「この火で物を照らせば、ともしだされないものはない。」

すなわち「照」は「鏡」についても、「火」についても、同じく「照物」と言われうるのである。これをどう考えるべきであろうか。

私は次のような朱熹の言述の記録より、この「照」は「物の姿を現出する」意味として統一的に理解すべきであると考える。すなわち、

燈有光焰、物来便燒。鏡雖照見、只在裏面。(『朱子語類』卷87-163条)

「ともしびにはほのおがあって、物がやって来ると焼いてしまう。鏡の方は同じく照らし出すとはいえ、ただ内側でやるのだ。」

ともし火は自らの外側に光を放出し、その光によって自らの外に「物の姿を現出する」。一方「鏡」は自らの内に光をたたえ、その光によって自らの内に「物の姿を現出する」のである。もしもこの解釈が正しいとするなら、そもそも我々が「視覚的形象」としている「物の姿」そのものについての理解方式も、朱熹のそれと我々のそれとでは根本的に違うのかもしれないという問題が浮かび上がってこよう。

また、この「照」という語が表す作用が「ほのお」と「鏡」において同一であるという感性を軸点として、一般にそのような感性を通じて世界を把持している人々においては、太陽あるいは月の光がこの世界の隈々に至るまでをくっきりと「現出している」光景が、一気に「鏡」の中の世界、あるいは鏡と同一様の磨き込まれた「水晶球」の中に「現出している」光景へと転換して観じられる底の「詩的直感」が成立しやすいということも言いうるのであろう。そのような、世界の観じ方に一気に起こる我々からすれば「剥奪的転換」とでも謂うべき例を、我々は中国の古典的詩文のうちに示すことも出来るのである。

b. 「場」として

以上のような「照」についての考察を含め、朱熹の「鏡」にかかわるテキストの分析より、私は次のような結論に到達した。

すなわち朱熹にとって「鏡」とは、何か物がその前にやって来るとその到来に「感応」してその物の影像を自らの内に現出する能力を持っている「場所」であった、と。

しかし先ず、その「場所」とは、単純に空っぽな領域であり、何かとそれとは無関係・独立した存在としてそこに出入りしていく「空間」ではなく、或る潜勢的な能力、ここでは感応して物の影像を現出するという能力、をその全域において「張り互し」「張り詰めている」と観念され、その場所自体がその能力そのものの広がりであり、かつそれが働く顕現の場であり、そこに現れる存在、ここでは或る影像、はその場所と

して広がる能力が働き出だした産出物としてのみ存在する、その「場所=能力」から非一独立な「現像」であると観念されていた。とするなら、このように能力の張り互しとしての「ひろがり」として観念されている「場所」については、我々はこれを「場所」と呼ぶよりは特に「場」と呼んでこのことを明確にする方がより適切であろう。

また次に、「鏡」は朱熹たちにとっては我々の言う「金属」の塊を平面状に磨きたたえたものであるから、今まとめた「鏡」についての記述は実は我々の所謂「金属」という「物質」についての彼の理解を記述していることにもなる。彼に即して言えば、所謂「五行=木・火・土・金・水」の内の「金」についての彼の理解を記述していることになる。事実朱熹のテキストにおいては、「鏡」についての言述中に「金」なる語が現れ、またこの、物の影像を現出するという能力において、「金」と「水」とを同一であるとする言述も現れる。

この二点における注意を基底において、朱熹の「鏡」についての理解をまとめ直すと次のようになる。

すなわち、鏡とは、金属の一つ一つの塊が一つ一つの「場」として張り詰めている、物の去来にしたがって自らの内の光により自らの内にその物の姿を影像として現出し、その影像を存続し、消去する、全く何の無理も感じさせない、迅速そのものに働く内在的感応能力を、その塊を人が磨くということにより、ただちに発現しうる臨界域へと到達させたものである、と。

朱熹は、我々が「物」と呼んでいるレベルの存在、また我々が「物質」と呼んでいるレベルの存在について、我々が今日普通に採るようにはますますなりつつある「機械論的」と呼ばれる理解方式とはずいぶんと異なる理解を行っていたということになる。

c. 体一用

「体一用」の論理が朱熹の言述中に頻出することはよく知られている。

「鏡」にかかわる言述の中にもこの論理図式は出現する。以上にまとめた「鏡」についての彼の理解、また「物」なり「物質」なりについての我々とはずいぶんと異なる彼の理解を踏まえて、この「体-用」の論理の意味するところも捉え返される必要がある。

すなわち、「体-用」の「体」とは、或る特定の活動を発現する「場所=能力」である或る特定の「場」が「感応」し働いていない準位にある、その静かに内なる能力を張り詰めしずもっている様態にある、その「場」のことを謂い、「用」とはその「場」が「感応」して現実にその能力を発現して或る活動が進行している準位・様態にあることを謂う、と。特定の或る働き、役割、機能を果たす存在はそれぞれがひとつの「場」として捉えられ、そのそれぞれの「場」は、「体」の準位と「用」の準位の間を、「感応する/しない」を準位変換素として振れていると理解するのである。

ところで朱熹は、この「感応」について「对他感応」と「自己感応」とを分析している。

「对他感応」は他存在が外からその「場」に対して出現し、これにその「場」が反応して自らの内の能力を展開していくもの。その場合、その「場」の準位を「体」から「用」へと変換させるのは、外界に対して常に待機している感知能力がその「場」の有つ本-能力を発動すべき外的状況の出来（しゅったい）を感知しその本-能力の発動を起動する、その「場」がやはり前提的に有つ「感知・起動能力」である。これなくしては本-能力の発動というその「場」の準位変換は起こり得ない。我々としては、朱熹がたとえば「心」について「知覚」という言葉によって問題化するこの能力を、その「場」の「本-能力」に対する、その「場」の「メタ-能力」と解釈しておきたい。

一方「自己感応」とは、朱熹の挙げる例でいえば、陰が陽になりまたその陽が陰になる、あるいは人がひとしきりしゃべるとおのずからに黙り込み、ひとしきり黙り込むとまた話し出すといったもの。この種の準

位変換は、その「場」にあって、その「場」の内に進み行く時の刻み行きの中で、或るタイミングを採ってその「場」の準位を変換して行く、やはり同じくその「場」の有つ「メタ - 能力」によって起動される。この方の「メタ - 能力」も、或る「場」の有つ自らの時間経験の推移の中でタイミングの到来を感知し、準位を変換して行くという意味で、やはりある種の「感知・起動能力」であると理解することが出来るだろう。

「対他感応」の場合にはその「メタ - 能力」は外界をモニターしており、「自己感応」の場合には自己内の時の刻み行きをモニターしているということになる。

以下の「2 - 心の理解」において取り上げる「心」について、今も述べたごとく朱熹は「知覚」なるものを問題化するが、そのことによって問題化されているのは、まさにこのような「メタ - 能力」が「本 - 能力」と別に存在しなければ「場」そのものが成り立たないということであろう。

また「3 - 天地の化」において取り上げる「天地」とは、我々が「世界」なり「宇宙」なりといった言葉で捉えるレベル・規模での存在をあらゆる言葉であるが、朱熹はこれをやはりひとつの「場」として捉え、周敦頤の「太極図説」に従い、その「場」の最も基本的な準位変換を今も出た「陰 - 陽」の変換とした。そしてその「図説」において「陰 - 陽」変換の上位に設定された「太極」なる存在を、その「陰 - 陽」変換についての「メタ - 能力」、すなわち「天地」という「場」の内の時の刻み行きをモニターし、絶妙のタイミングをとって「陰 - 陽」の準位変換を起動していく「感知・起動能力」と解釈したのであった。

2 - 「心」の理解

a. 二項的思考より三項的思考へ

「心」は朱熹の思索の基底をなすテーマである。その「心」について

の朱熹の理解図式が、彼の40歳のときに起きたと考えられる、所謂「定論確立」の事件により大きく転換したことは、学友たちへの彼自身の明快な報告の文章によってよく知られている。この転換において、単に「心」というテーマだけに終わるのではない、彼の基底的な思考図式の組換えが起こった。それは端的には「二項的思考より三項的思考へ」とまとめうる転換である。

問題は、『中庸』のよく知られる「喜怒哀楽の未だ発せざるは之を中と謂い、発して皆な節に中（あた）るは之を和と謂う」なる分析を原典として、人間の内面活動をどう理解付けるかというところにある。先ずはここには、人間の内面活動を「喜怒哀楽」にまとめ、この活動に「未だ発せざる」段階、これを簡単に「未発」の段階と呼ぶ、と、「発して」の段階、これを簡単に「已発」の段階と呼ぶ、の二項対立を導入して理解する図式が示されている。「定論確立」以前の朱熹は、人間の内面活動を対象化し分析するときの古典的な基本用語であった「心」と「性」という言葉を、この二項対立図式に単純に割り振り、「未発」が「性」、「已発」が「心」としていた。しかしこれでは結局、「性」と「心」が強い二項対立の関係に陥り、互いに断絶して連絡し得ないものとなってしまふ。この難点に気づいた朱熹は、これを次のような理解図式に転換したのであった。すなわち、「心」とは「未発」の状態＝「静」の状態、と、「已発」の状態＝「動」の状態とのあいだを繰り返し連続的に相互へと転換して行く、そのものとしてはひとつの存在である。この「未発」「静」の状態の時には、この「心」に内在している、外界の状況に応じて「よろこぶ（喜）べき」時には「よろこび（喜）」、「いかる（怒）べき」時には「いかる（怒）」など、適宜・的確に反応していく「情動能力」がそのものとして発動されずにそこに存在しており、一方その「能力」が外界の状況に対応して起動されて発動し、特定の、たとえば「喜ぶ」「いかる」などの活動に発現する、これが「心」の「已発」「動」の状態だ、としたのである。そして、この、今我々が特に「情動能力」と

解釈したものを、朱熹はここで改めて「性」と呼び、これは「未発」「静」のときにはそのものとしては未だ発動されて特定の「喜ぶ」なり「いかる」なりに分化してしまっていない、その意味で純粹・渾一なかたちで存在するが故に、特に強くにはこの「未発」状態のときにこそ「性」が存在すると言う。そして、その「性」が起動されて発動し、特定の「情動」として、「心」が身体に、そして外界の現実に関わりかけていく単一の力動態へと発現し終わっている、その「情動」を、「情」と規定したのである。このように転換された理解図式の中では、「心」が独自の全体者として前面に、あるいは基底におかれ、かつての「已発（心）－未発（性）」という二項対立図式での分裂を修復して強く統体化する「素地」となっているのである。

朱熹は「性」や「情」と区別される、そのものとしての「心」という存在を設定し、それについてはこれを特に「主宰する」と説明し、「知覚・運用」という働きを果たすものと言述する。すなわち彼はここで、「心」を、「性」を起動する「主体」存在として設定しているのである。しかも如此して起動された「性」が発動し、「情」へと発現するのは、その同じ「心」においてであるから、結局「心」とは「性」なる自らに内在する「情動能力」を主体的に起動することによって「情」へと自らを展開する「自己力動する場所」だということになる。すなわち「心」とは我々の言う「場」そのものである。

b. 「場」として

この「定論確立」によって朱熹の思考の基底となった理解図式をまとめるなら、「心」とは外界を常にモニターし、特定の状況の出来（しゅったい）を「知覚」し、それに対応する「情動能力」を起動し、自らをその外界へと働きかける「情動」へと当て込んで自己展開し変貌させる力動的な「場」だ、ということになる。朱熹の「心」をめぐる言述についての「場」というイメージをキーとする我々の解釈を、その言葉使い

そのものによって支持する朱熹のテキストを紹介しておく。

問。心之動、性之動。

曰。動処是心、動底是性。(『朱子語類』卷5-49条)

「質問。心の動と性の動の違いについて。

答え。動じている現場が心だ。動じているそのものが性だ。」

注記すれば、「動」というのは、これらの用例からすれば、「運動する」と訳して済ますわけには行かないだろう。現代の和語としては「運動する」は、おおむね「空間的移動・運動」を示すと思われるからである。これらの用例における「動」は「或るものが活性状態にある。外界への反応状態にある。」といった意味であり、したがってその反対語である「静」は「運動速度がゼロ」ということではなく、「或るものが不活性状態にある。外界への反応状態にない。」といった意味として捉える必要がある。

ここに特徴的に見られる「処」と「底」の対比をキーとする言述はこの他にも似たような分析の場面で用いられる。次の例はそのひとつである。原文だけを挙げておく。

「顕諸仁」是流行発用処。

「蔵諸用」是流行発見底物。(『朱子語類』卷74-129条)

ただし、このような「～底」と「～処」による分析が朱熹の思考において何を意味するのかについてはさらにより踏み込んだ考察が必要である。

3. 「天地の化」－ひとつの「場」として－

『論語』の次の一節は独特の深みを感じさせる孔子の言葉としてよく知られている。

子、川の上(ほとり)に在りて曰く「逝く者はかくの如きか、昼夜を舍(お)かず」と。(子罕第九)

これに対する朱熹の注釈は次のように始まる。

天地之化、往者過、來者統、無一息之停。乃道体之本然也。

(『論語集注』巻5)

朱熹の注釈は先ず、孔子の言葉の深さを、「天地之化」という言葉で受け止めている。先ずこの「天地之化」なる語は、『中庸』に、聖人にのみ「黙契」（朱熹『中庸章句』中の語）される、として現れる「天地之化育」を踏まえると考えるべきである。他のさまざまな朱熹の「天地」についての言述にも互って併せ考える限り、この「天地之化」なる語の意味するところは、我々が「世界」なり「宇宙」なりといった言葉で表す規模において展開している「変易の場」の、その「場」に載っている在りとし在るものをそのそれぞれの芯において「変易し（他動詞）て行く」働きのことを謂う、と解釈することが出来る。そのような在りとし在るものにおいて、「聖人」ならざる通常の知性には捉え得ない深さにおいて展開している「変易」の働き、を、朱熹はここで先ず提示し、それについて、その途切れなき持続という事実を次に提示し、それを「道体之本然」と受け止めるわけである。

この「道体之本然」に現れる「体」なる語は、それがついた語、ここでは「道」、の思考における対象性を硬質・鮮明に作り出す働きをする語である。我々が「物自体」「～自身」「～そのもの」などというときの「自体」「自身」「そのもの」にあたる。また「本然」の「本」というのも、「それぞれのものもはやどこにももっていくことのできない～」という意味であり、「本然」とは、したがって「それぞれのものどこにも持っていきようのない在り方、姿」ということになる。結局「体」も「本然」もあいまって「道」という言葉が表す存在を強く思考の対象として当体化しているわけである。「道そのもののそのもの」といった言いざまである。

ではその「道」とは一体いかなる語なのであろうか。それは朱熹においては、この「変易の場」としての世界の、その変易の働きに普遍的に

観察される「陰陽変換の循環的連続性」という事実に対して、さらに「なぜそのような循環的連続性があるのか」と問い詰めるときに問題化されるレベルの存在を表す語である。我々の言葉でいうならそのような循環的連続性の「根拠」と言うに当たる。

すなわちここで朱熹は、「天地」という「変易の場」がそもそもそのような「場」として成立し存続している「根拠」を問い、これに「停止することが無い」という事実をおいたのである。

しかしさらに、「天地の化」の「化」なる動詞が自動詞ではなく他動詞として考えられていたと、ここをめぐるさまざまなテキストの分析から解釈できることなどを考え合わせると、ここに「わずかにも停まることが無い（無一息之停）」と言われている、「変易の場」が示す事実も、「根拠」の問題レベルへと投射されることによって、この「変易の場」が成立する「根拠」そのものへと遷移せしめられ、そのレベル転換によって、「或る種の能作存在」へと成り立つかたちで受け止められていた、と解釈すべきではなからうか。

ここで「ある種の能作存在」と言うのは、それが「物」的な存在でも「人称」的な存在でもないからである。「作用」あるいは「働き」などといった言葉に我々が聞き取り読み取る或る認識対象を、そのものとして、「物」的な存在に還元することなく直截に認識せよ、という、「物」的な「存在」でない、言わば「事件」的な「存在」に注視することこそが朱熹という思索を特徴付けているのではないか。

以上のような次第を経て私は、この「天地という変易の場」の根拠として現わされている、朱熹のここでの「道」を、我々の解釈の言葉としては「純粹持続意志」という形で言い表すことが出来るのではないかと考えている。このような解釈が示唆する問題についてさらに考察を進めること、もちろんこのように解釈することの問題性も含めて朱熹のテキストに即しつつ考察を進めていくことが、現在の課題である。

(調整班研究会発表要旨)

西洋古典の伝承史における予型論的視点の影響について — 『牧歌』Ⅳと『オデュッセイア』を中心に—

秋山 学

(B01「伝承と受容(世界)」班・筑波大学)

'99.11.27 (於京大会館)での研究会では「西洋古典の伝承史における予型論的視点の影響について～『牧歌』Ⅳと『オデュッセイア』を中心に～」と題して発表をおこなった。

「予型論」(typologia)は元来聖書神学的な概念であり、旧約と新約の関係を予型と成就という形で捉える理論だと言えようが、予型が現れる文脈を旧約に限定せず、キリストの到来以前の段階において、既存の文化伝統のうちに潜む何らかのかたちでキリストを予示する素地を備えたものを広く指して用いることもできよう(今世紀後半における神学の趨勢)。ここでは西洋古典文学に限定し、比較的明瞭に現れるそのような「予型」として、ウェルギリウスの『牧歌』Ⅳ(嬰兒/cf.『イザヤ書』)、およびホメロスの『オデュッセイア』(マスト上のオデュッセウス/cf. 十字架上のキリスト)の二つの場合を取り上げたい。

ウェルギリウス(B.C.70-19)の『牧歌』第4歌には「クマエの予言の告げる、最良の時代がやって来る」という一節がある。この「クマエの予言」とは『シビュラの託宣』を意味する。この『託宣』の現在の刊本にはユダヤ教的なものやキリスト教的なものなどが混合して収められていることから、当時のものにもユダヤ教の予言が多数混ざっていたと推定される。『牧歌』第4歌は『イザヤ書』との類似を示して「平和をもたらず嬰兒の誕生」を歌うゆえに、ウェルギリウスは古代末期より「異教徒の預言者」と崇敬されたが、この類似の秘密は当時の『シビュ

ッラ」にユダヤ教の予言が含まれていたと推定することでひとまず解決される。紀元後には『シビュッラ』のうちにキリスト教的なものがさらに挿入されたため、受容史は一層複雑な様相を呈する。まずギリシア語版『シビュッラ』のうちには「イエス・キリスト、神の子、救い主」という句を読み込んだ織り句 (acrostic) 的なものがあり、西方では流布したものがラテン語版であったために、これがうまく成立しなかったが、アウグスティヌスはギリシア語版を推察してシビュッラの予言性を洞察し、『神の国』のなかで「彼女は神の国の民の一人に含まれるべきであろう」と語っている (XVIII.23)。ウェルギリウス『牧歌』第4歌13行の「あなたを導き手として〔平和の時代が始まる〕」(‘te duce,’) における「あなた」とは、文脈上当然執筆当時の執政官ポリオを指すが、この「あなた」のうちに「キリスト」を読み込む解釈がアウグスティヌスの『書簡』や『神の国』に見られる。アウグスティヌスはウェルギリウスが『シビュッラ』に拠ったことを前提とした上で、詩人がキリストの誕生を予知したのものとしてその預言性を認めている。‘te’ のうちに「キリスト」を読み込むアウグスティヌスのような解釈は、先行するラテン教父たちには認められず、むしろギリシア教父エウセビオスの作品の末尾に付されて伝わったコンスタンティヌス大帝の『聖なる人々の集いにおける演説』のうちにその淵源が求められる。この『演説』に関しては、ラテン語の原稿をギリシア語訳したものであろうとの仮説が出されている。『演説』は、シビュッラのギリシア語版 acrostic をはじめ、『牧歌』第4歌の叙事詩韻律によるギリシア語訳文をも収録しているが、その希訳の際に‘te’の「変容」が行われている。アウグスティヌスに関しては(ギリシア語通ではなかったとして)、Courcelleなどは彼が『演説』のラテン語原版を見ていた可能性を指摘している。もっともラテン語原版であればウェルギリウスを原文で引用していたはずで、「変容」は不成功に終わった可能性が高い。エウセビオス関連のものを(原文で)アウグスティヌスが渉漁していた可能性を考えたい。アウグスティヌス以降、

彼の影響力が絶大であったために、「シビュッラ」およびウェルギリウスの受容はアウグスティヌスの理解を基軸として展開されてゆく。ウェルギリウスの写本としては、古代末期に遡る数種の大文字写本が現存するが、以上のようなウェルギリウス評価を基盤にその筆写が行われたと考えて間違いはなかろう。下ってカロリング・ルネッサンス期には古典作品の写本が多数産みだされ、ウェルギリウスも、特に9世紀に写本が増大した詩人の一人である。だが同時にラテン教父の写本数も同程度の比率で増大しており、アウグスティヌスの写本数の変遷はそれを実証する。カロリング期の作家たちは、ラバヌス・マウルスの『宇宙論』の一節が物語るように、ほとんど「写本」と変わらないような教父の著作の引用作業に終始する面もあった。ラバヌスの『宇宙論』第15巻第3章「シビュッラについて」は、中途からアウグスティヌスの『神国論』第18巻第23章と同一の文となる。その途中にラクタンティウス『神学綱要』第4巻第18章からの引用があるが、これも含めてラバヌスの文はアウグスティヌスの「写し」に他ならない。従って「シビュッラ」およびウェルギリウスに対するアウグスティヌスの評価は、そのままこの時代にも受け継がれてゆく。ウェルギリウスの7つの古代写本はすべてイタリア起源であるが、中世初期にはそのうち少なくとも4つがカロリング朝系の修道院にあり、AとRはサン・ドニ修道院に、Pはロルシュに、Gはザンクト・ガレンにあったと推定されている。このうちサン・ドニ修道院は、ヒルドウインが院長であった頃、彼の命により『偽ディオニュシオス文書』の羅訳が企画され、東方の神学の摂取に積極的であったことが知られている。なおこの企画は後にエリウゲナにより、ニュッサのグレゴリオスやマクシモス・コンフェッソルも含めた東方教父著作の羅訳へと拡大される(860頃～)。ウェルギリウスのAとR写本に関しても、オーセールのヘイリクスが864/5頃にサン・ドニにおいて実見している。以上のような経緯から、9世紀のウェルギリウス受容に関しても、その基盤にはギリシア教父に遡る神学的な背景があったと考えたい。

次に『オデュッセイア』とギリシア教父との関わりに関してであるが、初期ギリシア教父の一人アレクサンドリアのクレメンスは、その著作『ギリシア人への勧告』の末尾に近い箇所において、船上のマストに身を縛り、歌う怪鳥セイレーネスの誘惑を遠ざけるオデュッセウス像のうちに、十字架上のキリストに身を委ねることにより救いを得る人の姿を見出している。これは、旧約聖書のうちにばかりでなく異教文学のうちにもキリストの予型を見出す「異教文学予型論」的な解釈だと理解してよいと考えられる。ギリシア古典は、9世紀に始まるマケドニア朝ルネッサンス期以降、小文字本の普及と相まって写本数が増大するが、この文芸復興を担った一人にカエサリアの大主教アレタスがいる。彼は現存するクレメンスの最良写本Pを筆写させたことで知られる。アレタス関係の写本蔵書は現存し（8種）、古文書学的実証が可能となる最古の写本資料となっており、写字生も特定されるものが多い。10世紀のものと推定されるホメロス『イリアス』の写本A(Ven.454)の筆写生が誰であるかに関しては、スコリアAの内容と相まって未だに定説が確立されていないが、Severynsらによればこの写本はアレタスの次代のものに属し、その原本はアレタスの蔵書にあったものと推定されている。またHemmerdingerはさらに、その写字生をEphraim monachosと同定している。Erbseらによる慎重な見解はあるものの、このA写本も同じアレタスのサークルの活動から生まれたものだと言ってよいだろう。実際アレタスの『書簡』には、クレメンス経由による『オデュッセイア』理解の痕跡らしき句があり、彼の寛容な人文主義的神学は、クレメンスのそれを引き継いだものと言えるかも知れない。

以上はほんの一例に過ぎないが、ホメロスおよびウエルギリウスに代表される西洋古典著作家たちの写本伝承史の背景には、ギリシア教父に遡る「異教予型」論的な、普遍的受容性を秘めた神学を認めることができるであろう。

(調整班研究会発表要旨)

日本現存朝鮮古書のデータベース化について

藤本幸夫

(A04「古典の世界像」班・富山大学)

1 前書き

筆者は朝鮮語学を専攻する者であるが、その傍、日本に現存する朝鮮古書の書誌学的研究にも携わって来た。

大学院時代の昭和42年から45年まで韓国のソウル大学に留学し、その際に朝鮮の古書に触れていたが、下記の事情で日本に却って朝鮮の古書が、しかも本国である韓国や北朝鮮に見られぬ善本が、多く存在するというを知った。帰国後朝鮮語学関係の古書調査に着手したが、朝鮮古書の99パーセント迄は漢字・漢文で書かれており、語学資料、つまりハングル(朝鮮文字)で書かれた古書は稀少だということが判った。

日本には中国書には遥かに及ばないが、かなりの量の朝鮮古書が伝存する。『日本書紀』によれば、応神朝に百濟博士王仁が、『論語』と『千字文』を^{モクダ}齎したという。その真偽はさて置くも、古代から多量の書籍が朝鮮半島より伝来されたことは確かなことである。奈良時代新羅に留学した僧審祥の将来した仏書目録が、転写されて伝わっている。その後江戸末に至る迄、様々な形で朝鮮から書籍が伝えられた。

日本に伝存する朝鮮本が多量に齎されたのは、豊臣秀吉の朝鮮侵略時(1592-1597)の将来、対馬藩宗家による蒐集、明治以降は日本の古本屋の朝鮮よりの購入、日本人学者及び集書家の朝鮮にての蒐集が中心である。

特に朝鮮侵略時の略奪本は、当然それ以前の刊行書であり、これらの古書は江戸幕府・公卿・大名家・寺院・集書家等によって珍重され、鄭重に保存されて来た。保存がよいというのは、換言すれば、あまり人手に触れる機会が与えられなかったということである。他方朝鮮では、これ

らの古書は日常の読書に供されたため、次第に破損や紛失を来し、現在 16 世紀末以前の古書で、完全な形で伝わるものは極めて僅かである。例えば 5 冊 1 セットのものが、その中 3~4 冊を失っていたり、残存する 1,2 冊も汚れ、部分的に破損する等の状況にある。その点日本伝存書は、時には装幀を改めたりはするものの、殆んどが完全に揃い、又は破損もなく伝えられている。書籍が完全であることは、書誌学研究の第一条件である。

筆者は一点ごとに 28 項目について調査及び研究を行うが、これによってある書籍が、何時、何処で、誰によって出版されたか、又はその出版の経緯や背景等も明らかにしようと努めている。データの蓄積につれ、出版文化を中心とした地方文化のあり方、朝鮮文化史の一局面が編めるようになる。出版状況と文化程度とは比例関係にある。

朝鮮本の研究は朝鮮に有意義であるばかりでなく、中国や日本にも関係する。即ち中国で出版された書籍が本国で何時の間にか失われ、却って朝鮮で出版されて伝存する場合がある。又日本に伝えられた朝鮮本を底本として、古くから出版が行われている。特に江戸初期には秀吉時に将来された朝鮮本をもとにして、思想・歴史・文学・語学・医学・本草等々の分野の書籍が出版され、日本の学問や文芸に大きな影響を与えている。江戸時代の官学であった朱子学は、朝鮮朱子学の甚大な影響下に成立した。このように朝鮮本研究は、単に朝鮮学研究に止まらず、中国学・日本学から見ても重要な意義を持つのである。以下にその 28 項目について述べる。

2 入力項目について

(1) 書名

ここには書名と何巻何冊かを記す。書名や巻数の採り方のむつかしいものもあり、冊数は同一書であっても、装幀の仕方によって異なる場合が

ある。

(2) 撰者

著者のことである。著者未詳のこともある。中国人と朝鮮人は命名法が共通するため、国籍がいずれか決定し難い場合がある。特に僧の場合、中国・朝鮮・日本三国に共通するため、甚だ判別はむづかしい。

(3) 版種

木版に彫って印刷した木版本や手書きの写本が一般的であるが、その他に活字本がある。活字には木活字と金属活字がある。木活字は中国・日本でも用いられる。朝鮮の場合木活字は民間印刷に多く、官の印刷には金属活字がよく用いられる。朝鮮は金属活字印刷が特に発達した国で、精巧を極め、中国や日本は遥かに及ばない。金属活字は官でも五十種近く鑄造されており、その種類を識別して記入しなければならない。

(4) 刊者

出版者のことで、朝鮮では民間出版業は盛んではなかった。中央(ソウル)や地方の官出版の他に、門弟・子孫・書院・寺刹・祠堂等の出版がある。出版についての情報は、後述の序文(前書き)や跋文(後書き)に記されていることが多いので、それらを丹念に読んで拾い出す必要がある。幾人か出版関係者を確認し得ても、中心人物特定の困難な場合がある。序文や跋文があっても出版者に言及しないことがあり、又そもそも序文・跋文のない場合もかなり多く、出版者未詳も少なくない。

(5) 刊年

出版年のことであるが、(15)刊記という、出版時期や出版者・出版地を記した記録がある場合や、序文・跋文から探り出し得る場合はいいが、それらが全くない場合は刊年未詳となる。その時には紙質や字体、後述の(10)版式や(22)蔵書印等を参考にして刊年を推定する。推定はすべて[]中に入れる。序文や跋文の書かれた時期が判っても、それらを書き手から受け取って、その書籍がすぐに出版されたとは限らない。数十年後のこともあり得るので、注意が必要である。序文や跋文に「板木を彫ろうとする」、或いは「原稿を刻工(彫り手)に渡した」とあるのを刊

年と見なす向きもあるが、筆者はそれを採らない。明確に「彫り終った」とあって始めて刊年と見なす。

(6) 刊地

出版地のことである。出版地が記されていることは稀である。中央政府で金属活字によって出版された場合の出版地は、ソウルの校書館や奎章閣と見なし得、地方官庁の出版物は、それぞれ地方の官庁と考えることができる。しかし先祖の詩文集を子孫が出版した場合は、殆んど出版地は判らない。朝鮮では同族が一定の場所に世居することが多いので、著者の郷里に子孫が居住し、そこで出版されたと一応は考えられるが、一族挙げて他地方に移住することも稀ではないので、すべてそのように考えることも出来ない。何時、何処で、どのような書籍が出版されたのかは、地方文化を探る尺度ともなり得るので、文化的観点からも重要である。ところで出版地を探り出すのに、極めて有効な手段がある。それは後述の(17)刻工名、つまり木版本の場合、その板木を彫った人の名である。何時、何処に、何某なる刻工が存在したということが判っていれば、ある書籍の刻工名を手掛りに、その書籍の出版時と出版地が決定できるのである。しかし刻工名の蒐集は後述するように、容易なことではない。

(7) 装幀

表紙のことであるが、書籍の中身を前後二枚の厚紙ではさみ、右側の縁を糸で綴じるのである。朝鮮表紙は黄色に染め、様々な模様を打ち出しており、それを太い朱糸で五ヶ所に穴をあけて綴じるのが一般的である。模様によってある程度時代が推定できる。日本にあるものは、渋引きの褐色表紙に改装されていることがある。その場合には上下が切断されることが多い。十八世紀後半から十九世紀前半にかけて中国装幀が流行し、中国竹紙に中国表紙、綴じ穴が四ヶ所のこともある。

(8) 寸法

本の縦横の大きさである。朝鮮本は元来大型であるが、日本改装の場合は、縦横ともに切断されることがある。

(9) 紙質

一般的には楮紙である。但し時代によって若干異りがある。中国・日本・朝鮮、いずれの出版物であるのか判らぬ場合も稀にはある。中国装幀にした場合、清朝で一般的に用いられた竹紙によっている。竹紙は百年、二百年するとボロボロに劣化し、今日清代出版物の中には、触れるのも憚られるものがある。楮紙はそれに比べると半永久的に生命を持つ。朝鮮のハイカラな人達は、当然竹紙の脆弱さを知らなかったために、結果的には自滅の道を進む、見た目には瀧めの細やかで紙白美しい竹紙を珍重したことになる。

(10) 版式

版式とは、毎頁毎に四角枠があり、その中が十行程に仕切られ、毎行に二十字程の字が排列されているが、四角枠の縦横の長さ・何行・一行何字という様式である。行数や字数は、時代によって大体の傾向がある。仕切りのない場合もあり、又一行に小字二行分の入ることもある。同じ書名の書籍でも、異なる時期に出版されたものは、時代の風潮に従って版式の異なることがある。

(11) 版心

昔の書籍は、例えば縦三十糎、横五十糎ほどの紙に木版で印刷し、縦に二つに折って綴じてある。その折目の所に一行分ほどの空白があり、ここを版心という。版心には書名や頁数、一種の飾りのようなものが刷られている。その形式が時代によって異り、それによって出版の時期もある程度推量できるので重要である。

(12) 構成

構成とは本の内容であり、どういう順序で、何が記載されているかを記述する。その一例を挙げると、序文・総目録・各巻毎の目録・本文・年譜・行状・附録・補遺・跋文等々である。同版(同じ板木からの印刷書)であっても、内容の順序が異っていたり、欠けている場合があり、どれが元来の姿なのかを定める必要がある。また序文や跋文が幾つもある場合、順序がかわったり、脱落していることもある。

(13) 序文

前書きのことである。序は著名人や著者の先生や先輩が、その書籍の成立経緯に触れ、又賞讃するのが普通である。序文中の出版に関する記事はすべて入力している。

(14) 跋文

後書きである。後書きは一般に、その書籍の出版に携わった子孫や門下生達の、出版経緯への言及を収めることが多い。出版の費用・部数や出版にかかった日数など、興味深い記録の見られることもある。出版経緯に関する部分はすべて入力する。

(15) 刊記

その書籍の最後尾に、通常一～二行で、誰が、何時、何処で出版したかを、簡単に示したものである。文章になっても、もう少し長いものは刊語と呼ばれる。刊記があればこれによって、誰が、何時、何処で出版したかという、最も重要な点が解決される。仏書には刊記は非常に多いが、それ以外では極めて少ない。仏書の場合は、父母の供養のため、或いは多くの信者が集って後世の極楽往生を願って出版するため、それらの人々の名前や刊年、そして刻工名が完名で刻されている場合が多く、書誌学研究にとって、極めて有益な情報源と言い得るのである。中国や日本では出版が企業となり、出版者が自己の版權を主張するため刊記を附すが、朝鮮では出版業がさほど活発でなかったため、刊記を欠くのである。刊記がないため朝鮮本では、金属活字の種類・版式・紙質などによって、刊年を推定しなければならない場合が多い。

ところで注意すべきことは、刊記はそのまま信じられないということがある。古い時代の書籍を、例えば二百年に再び出す場合、古い刊記をそのまま襲い、新しい刊記をつけないことがある。古い刊記はテキストの正当性と権威づけの役割を果す。鑑定に習熟しない人は、古い刊年の年代のものと判定してしまい易い。刊記の年代と紙質が一致するか否かに留意しなければならないが、これは容易なことではない。

(16) 原刊記

これは新たに出版する書籍の、底本の刊記である。この原刊記によって底本の素姓が判る。朝鮮で中国本を出版した場合、その原刊記によって、底本たる中国本が何時・何処で出版されたものであるかが判り、中国学にとっても貴重な資料たり得るのである。

(17) 刻工名

(11) 版心については上述したが、版心に魚尾と呼ばれる魚の尾に似た形の黒刷りの飾りが上・下にあり、又その上下に黒口と呼ばれる、黒い柱状の飾りのあることがある。朝鮮本の場合は魚尾や黒口の中に陰刻(つまり白抜き)で、その版木の刻工(彫り手)の名が彫られている。朝鮮では通常、僧が刻工にあたる。僧名は中国や日本と同様に、「法雲」などをつけられる。版心部に「法雲」と完名で彫られてあればよいのであるが、普通「法」又は「雲」の如く一方だけが彫られており、完名が判らないのである。又「雙」字が「双」と書かれ、これが、「又」に略されると、「又」から「雙・双」字への返還は不可能である。刻工名はその板木を刻した賃金を要求する証拠となるものであるから、当事者だけに判ればよく、必ずしも完名である必要がないのである。

ところでこのように版心に刻工名があり、更に刻工名の完名を含む刊記がある場合、例えば、「法」や「雲」が「法雲」の略であることが判り、更に刊記によって何時・何処の刻工であるのかも特定できる。この作業を重ねて刻工名の一覧表が完成すれば、刻工名を手掛りにして刊年未詳の書籍の、刊年や刊地をも決定することが可能となるのである。筆者は刻工名のすべてを、第何巻第何張と出所を付してデータに入力している。従ってこれを確証として同版・異版を識別することができる。

(18) 内賜記

内賜記とは宣賜記とも言われ、王が中央官庁で出版した書籍を臣下に下賜する際、第一冊表紙裏に、何時、誰に、何書を与える旨を記したものである。一般に書籍が出版されると即ちに与えられるので、内賜記の年月を以って、その書籍の刊年と見なすのである。前述の如く朝鮮本には刊記のない場合が多いので、この内賜記が刊年を決定する重要な手掛

かりとなる。豊臣秀吉以前に出版された書籍で、この内賜記を有するものが日本に非常に多いので、日本現存本が重要な意味を持つ。ただ内賜記の年月を、そのまま刊年と見なし得るや否やについては、若干検討の余地がある。

(19) 諺解

諺解というのは、昔で言う諺文(朝鮮文字、ハングル)による、漢文本の朝鮮語訳である。多くの中国書が諺解されているが、最初に漢文の本文が一段落あり、続いて一字下げで諺解の来るのが一般である。資料が諺解本である場合には、この項で言及する。日本には韓国に失われた諺解本が多い。一七世紀にはハングルだけの小説が出現するが、これは諺解本ではなく、ハングル本である。書名もハングルで書かれている。

(20) 吐

「吐」とは略体漢字による、送り仮名である。漢文本の左傍や右傍に、読者が墨書したものである。本文中に刻される場合もあるが、通常は手書きである。これは朝鮮語学研究にとって極めて重要で、吐の存在有無を示す必要がある。近年は朝鮮に訓読のあることが発見され、日本漢文の訓読におけるように、漢数字で読み順を示したものもある。

(21) 封面

第一冊前表紙の次に来る、書名・刊年・刊地・刊者等を記した一張である。中国本の影響下に生じ、朝鮮では一八世紀後半より見られる。これによって多くの出版事項が得られる。

(22) 蔵書印

当該書旧蔵者の蔵書印である。豊臣秀吉以前の朝鮮人の蔵書印が日本では多く見られ、本国では失われたものが多い。蔵書印も出版年代の推定に役立って重要である。蔵書印は通常篆書で書かれているため、解読は甚だ困難を伴う。一人が複数印を有する場合もあり、又何人もの印が押されていることもある。複数印のある場合、何人の印かを識別するのは容易ではない。将来蔵書印譜を作製するために、蔵書印を蒐集してい

る。日本人蔵書家の印も記録する。

(23) 識語

当該書の末尾等に記された持主の記録である。持主の姓名が多く、誰から受贈された等の識語もある。日本の古書には識語が甚だ多いが、朝鮮本には稀少である。

(24) 註記

ここには表紙の書名・保存状況・内容順序の異同・内容の脱落等、他の項目で書かれなかったことを記す。

(25) 撰者伝

撰者の経歴についてここに記す。朝鮮人の経歴を知るには、『朝鮮人名辞書』（朝鮮総督府中枢院、一九三九、京城）が、現在でも最も優れている。最低限度の経歴以外は、この辞書収録の記事を省き、未収録の事柄、即ち誕生と死亡の月日と場所、出身地、墓地等を記す。これらの事柄は、当該書本文中や「年譜」等から採集する。近年『韓国歴代人物伝集成』（民昌文化社、一九九四、ソウル）が出版され、ここに多くの墓誌銘等の第一資料が影印で収められていて有益である。

(26) 藍本

藍本とは、当該書のもとになった底本である。中国書或いは朝鮮書を底本として、新たに出版することがあるが、その際に底本として何を用了かをここに述べる。詳説は避けるが、これにはかなり困難な問題を伴う。底本を原稿（これを版下という）として板木にはりつけて刻するのを覆刻といい、底本によって行数字数を全く同じに、或いは行数字数を違えた版下を作り、これを板木にはりつけて刻するのを重刻という。この区別が必要である。覆刻の場合は底本と酷似するので両者が混同されやすく、注意が必要である。

(27) 私案

これは筆者の当該書に関する見解である。朝鮮本に刊記の稀なことは上述したが、筆者は序文・跋文・刻工名・紙質・蔵書印等によって、刊者・刊年・刊地等を推定する。その際李朝時代の冊板目録や近年編纂の

諸目録を参考にする。刊者や刊地に関して諸人名や諸地名の考証を行うが、朝鮮学では工具書が充分でなく、又韓国の出版物には誤植が多いので慎重を要する。筆者にとって28項目中、ここが最も力の注がれる所である。客観と主観の混った記述は、資料として価値が少ない。筆者の場合本項は主観的記述とし、それ以外は客観的記述として截然と区別している。

(28) 所蔵者

これは当該書を所蔵している機関名である。

3 結論

以上筆者が入力している28項目について、その内容を概説した。これほど多くの項目を収録することは、従来目録にはなかった。目録は簡便を旨とするために、又紙幅の制限上多くの項目を収録し得ず、更に28項目を確認するためには、厩大な時間が必要であるため、行われていないのが実状である。筆者の如き28項目の記述は、善本解題や小論文にむしろ近い。しかし出版文化全体を把握するためには、善本でない書籍についても詳細な記述が必要であり、それによってこそ全き出版文化の総合的理解が可能である。その為の資料提供を筆者は目指している。

このデータベースが完成すれば、朝鮮学のみならず、中国学・日本学にも資する所大であろう。

(調整班研究会発表要旨)

古典学の現在 I

平成 12 年 3 月・神戸

[編集・発行] 文部省科学研究費特定領域研究

「古典学の再構築」総括班

[領域代表] 中谷英明

[事務局] 〒651-2180 神戸市西区伊川谷町有瀬 518

神戸学院大学 人文学部

Tel. (078) 974-1551 Fax. (078) 976-1715

E-mail nakatani@human.kobegakuin.ac.jp

